三吉陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査

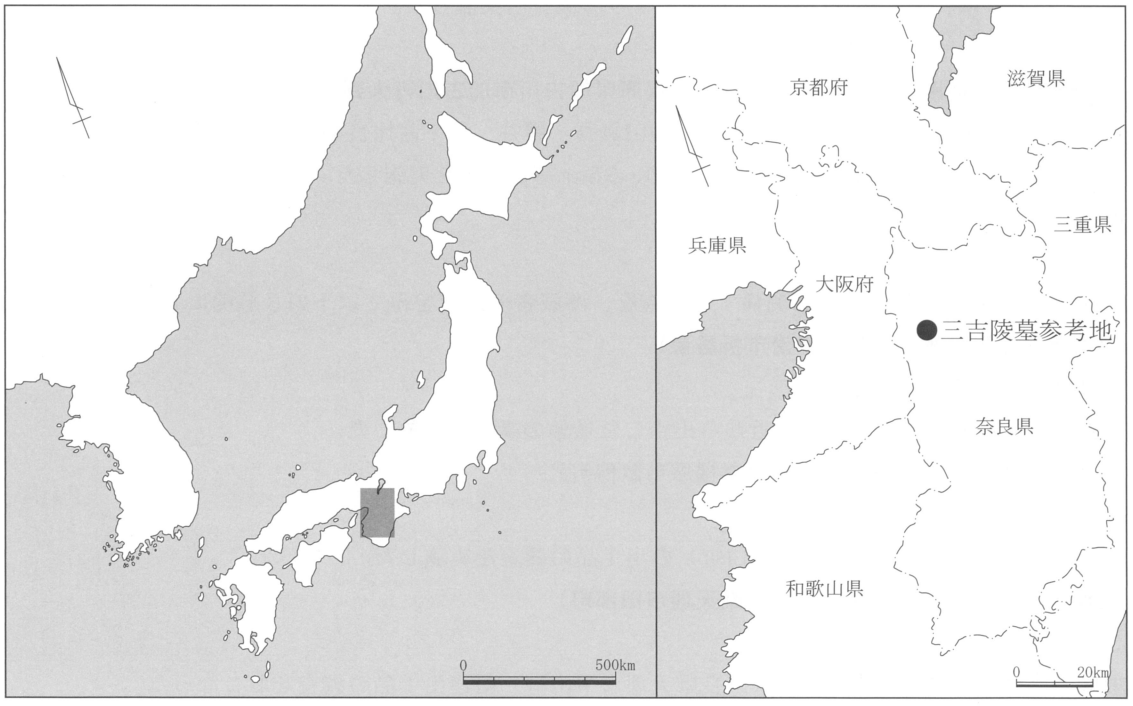
はじめに

本参考地は、奈良県北葛城郡広陵町大字三吉に所在する、現状で全長約200ｍを測る前方後円墳で、遺跡名称は新木山古墳である（第１図）。奈良盆地の西側に位置する馬見丘陵の東側斜面に前方部を東に向けて築造されている。馬見丘陵上には、広く馬見古墳群が展開しているが、その中のいわゆる「中央群」に含まれる。ほぼ同規模の磐園陵墓参考地や巣山古墳と共に、古墳群中でもっとも規模の大きいもののひとつであり、巣山古墳とは造出の形態なども類似することが知られている（第２図）。

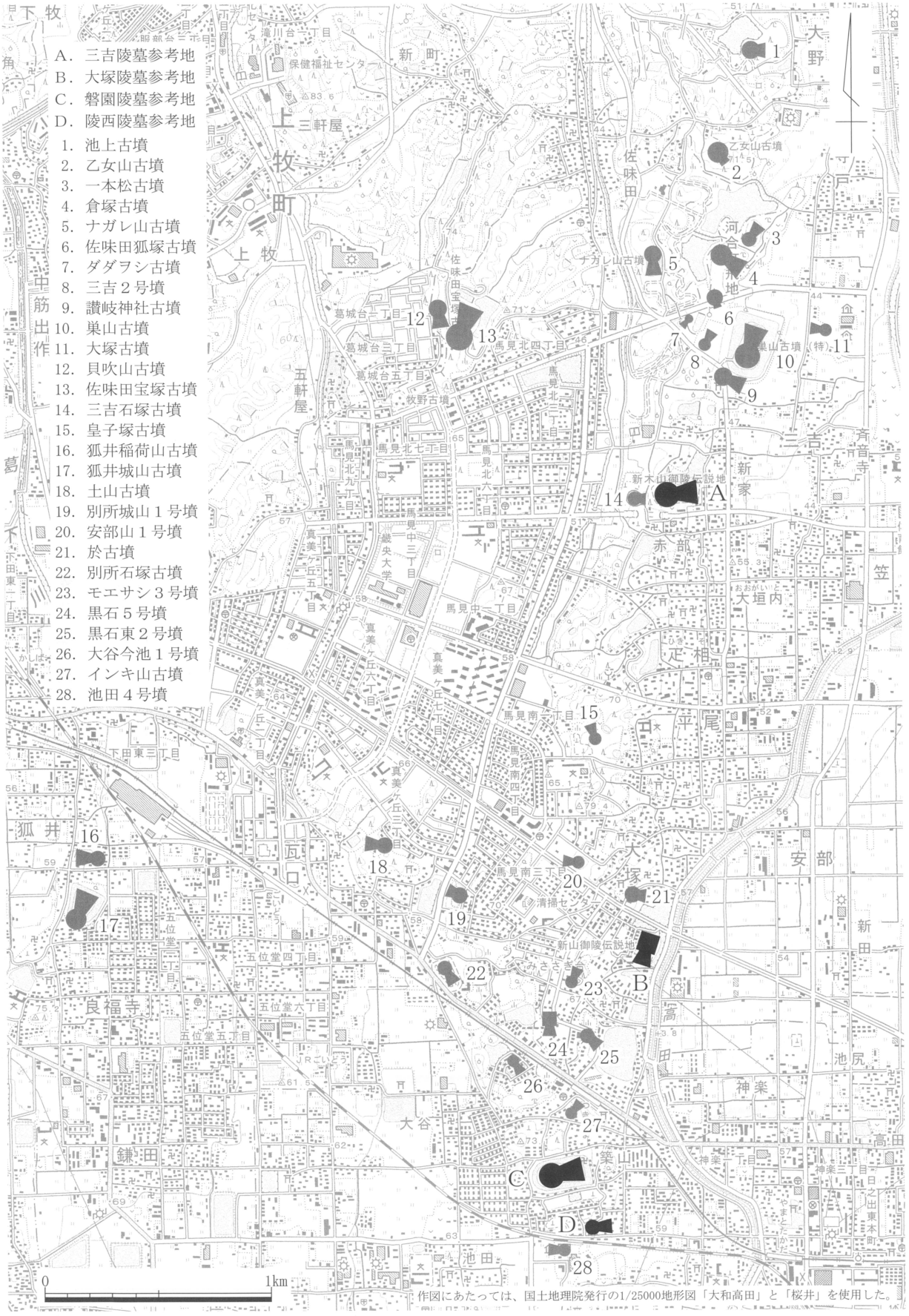
周辺の地質・地理　広陵町は、西南日本内帯上にあり大阪層群の下に基盤岩類として花崗閃緑岩が分布していると考えられている。西に大和川南岸から始まる、長さが南北約７㎞、幅が東西約３㎞を測る標高70～80ｍの洪積台地である馬見丘陵があり、東に高田川、葛城川、曽我川により形成された、標高40～50ｍの沖積地が形成されている。町域の北には大和川を挟んで矢田丘陵が延び、西は二上山塊に至り、東には奈良盆地が広がる。南にはいま少し馬見丘陵が続いた後、沖積地に移行する。丘陵の内側には南北に２本の大きな谷が走り、佐味田川と滝川が流れ、さらに細かい谷が丘陵内に広がっている[1]。

周辺の遺跡　旧石器時代の遺跡は現在未確認であるが、隣接地域では確認されている。縄文時代も多くはなく、中世遺跡として著名な箸尾遺跡で後～晩期の土器などが出土している。弥生時代は前～中期を中心に幾つか知られるが、箸尾遺跡以外に顕著な事例が認められていない。古墳時代については、やはり箸尾遺跡で住居跡が多数検出されるなど、集落の状況が少しずつ明らかになりつつある。そして、馬見古墳群が丘陵東縁部を中心に展開しており、前期～後期まで連綿として築かれている。前～中期に比較的大形で著名な古墳が多いが、中～後期古墳は、これらの古墳の近隣に築造される場合もあれば、異なる丘陵上に築かれるものもある。本参考地が位置するいわゆる「中央群」には、本参考地から北に約600ｍ離れて巣山古墳に至り、さらに北方に、ナガレ山、倉塚、乙女山などの各古墳が築かれている。

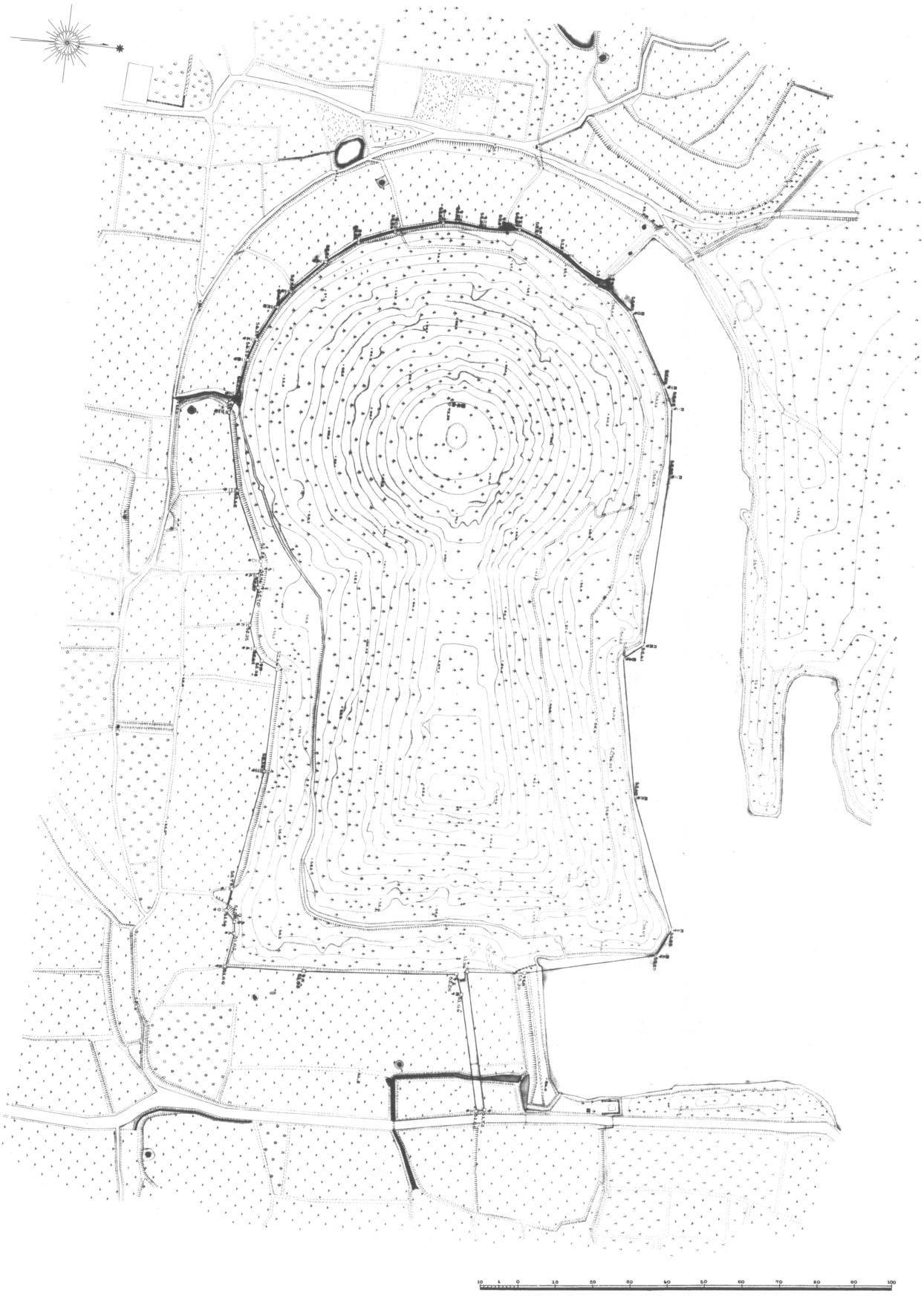
来歴と現況　本参考地は明治19年６月に御陵墓伝説地として治定され、これに先立つ明治15年３月には、後述する勾玉・管玉合わせて７点が出土し、明治17年５月に宮内省により買い上げられている。その



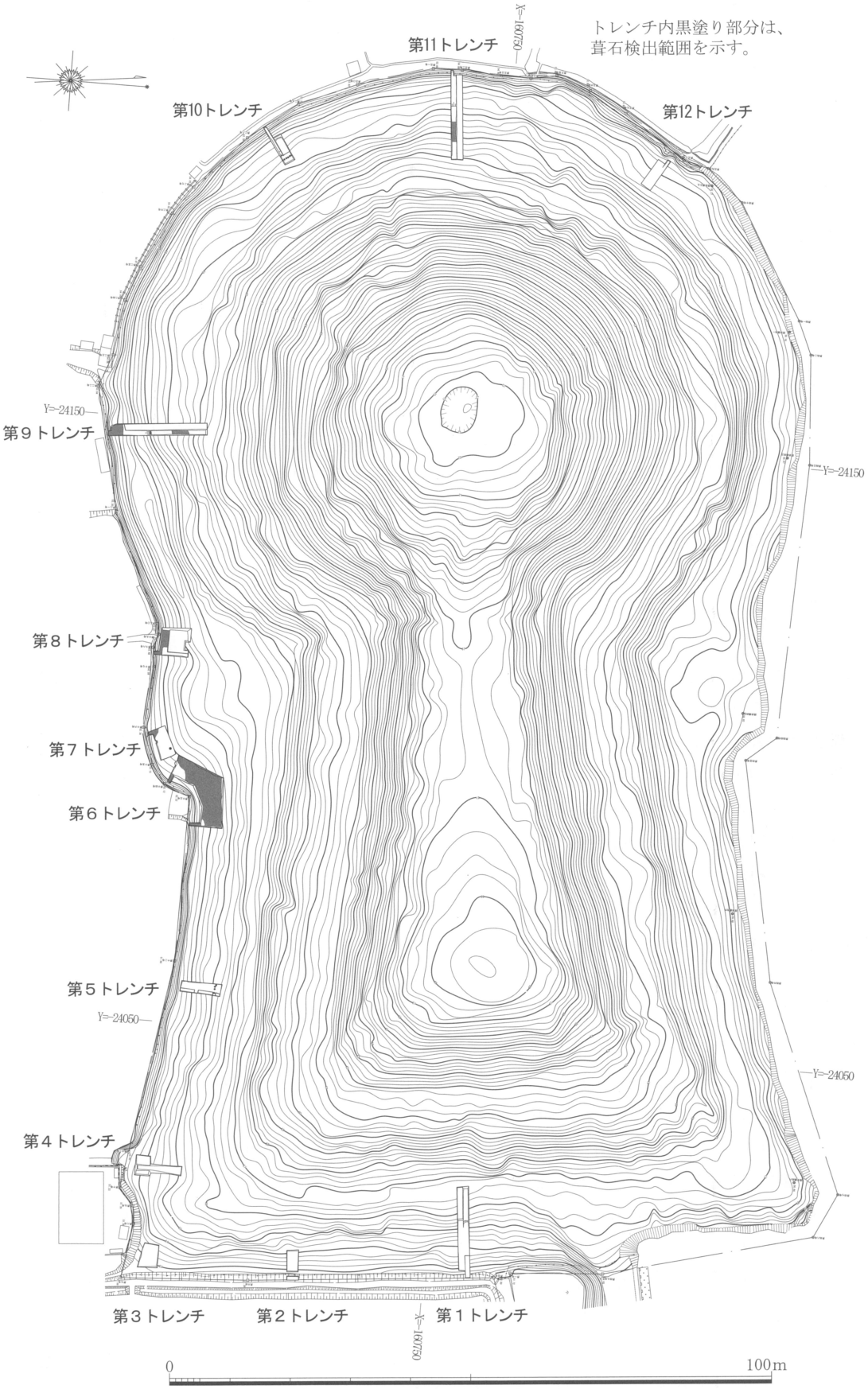
第１図　三吉陵墓参考地　概略位置図（1/25,000,000、1/2,000,000）



第２図　三吉陵墓参考地　周辺古墳位置図（1/25,000）



第３図　三吉陵墓参考地　陵墓地形図（1/1,500）



第４図　三吉陵墓参考地　トレンチ配置図（1/1,000）

後大正15年以降に陵墓参考地と改称されて、現在に至っている。昭和3年には陵墓地形図が作成されて(第3図)、墳丘と周濠の状況が図化された。境界線は墳丘裾を廻っており、前方部前面の一部が東側に参道として伸びている。周濠部分は、現在民有地となっているが、墳丘北側は拡幅されて溜池(今池)になっており、東・西・南側は耕作地や借地公園として利用されている。なお、本参考地に飛地は付随していない。

本参考地の隣接地では、1987・1988年と1990～1991年に広陵町教育委員会により調査が行われている。この一連の調査により、周濠の外側を廻る外堤の様相が判明している。調査成果によると、墳丘の南側から西側を回り込み北側にかけて外堤の痕跡を確認しており、外堤幅は約20～22mを測る。外堤盛土は南側のトレンチでのみ確認されており、西～北側にかけては確認されていない。高さは3m以上が推定されている。

また、外堤盛土を行う前に地山の窪地を整地している箇所も確認されている。後円部の西～北側にかけては外堤の外側を画する溝が確認されている。地形が高まっているため、地山成形のみで造成されたものである可能性が高い。溝そのものは狭く浅いものであることから、多少は削平されていることも考慮しておく必要があろうか。また、埴輪片も少量出土しており、埴輪列が存在していた可能性が指摘されている。

周濠幅は南側で約22m、西側で約18mを測る。南側の周濠床面は中世には削平されていたと考えられ、築造時の遺物のみを含むごく初期の土層は確認されていない。北側は溜池となっており周濠内部の状況は不明であるが、外堤側で浚渫土の堆積がみられることから大規模な浚渫が行われていたことが窺われる。土層の状況や遺物の様相から、平安時代中期を皮切りに近世に至るまで、複数回にわたって行われたことが判明している[(2)]。

また、外堤の西に接して帆立貝形の三吉石塚古墳があり、1987年と1995年の調査の結果、前方部で墓道が検出され、まとまった埴輪も出土している。そのほか、北側外堤上には、ノノワ古墳群が形成されている。

このように、周辺の調査成果や第3図からも判読できるように、本参考地には、境界外ではあるが周濠と外堤を伴っていることが知られている。

森本六爾氏の調査　上記のような近年行われた発掘調査のほかに，1923年8月6日には，森本六爾氏が本参考地を訪れ，現地踏査と聞き取り調査を行っている（第5図）。記載された内容は，それぞれに現在では確認できない情報が含まれており興味深い[(3)]。

なお，第3図の掲載にあたっては，調査記録の所蔵者である森本徹氏，ならびに寄託先の奈良県立橿原考古学研究所附属博物館のご高配をいただいた。記して感謝申し上げたい。

以下，後述する本調査の成果とも照らし合わせながら，概要を記しておきたい。

〔埋葬施設〕　埋葬施設については，一定期間経過後の聞き取りであるため，数値をはじめそれなりの錯誤が含まれている可能性を考える必要があろう。

主軸に平行する竪穴式石槨であり，規模は長さのみが記録される。約3～4mを測るようである（記録では10尺もしくは13尺か）。天井石は凝灰岩のようである。壁体は安山岩質の割石積みで，石材の大きさは30㎝以内，厚さは3～6㎝を測るようである。床面は白色石英質の小石が敷かれ，朱も見られたようである。厚さは不明である。明治20，30年頃に天井石が中央から折れて窪みが生じたことから発掘されたようであるが，玉類の出土が明治15年であることから，天井石破損の時期も明治15年のことと推測される。

〔その他の遺構〕　埴輪列の平面略測図があるが，墳丘における位置は前方部頂上に近い南側とあるので，前方部南側の第2段平坦面の埴輪列であろうか。本調査の結果から見ると，前方部側面の墳丘第1段平坦面（第4～5トレンチ付近）では，比較的堆積土が薄い。場所によっては地表面に露出していたものと考えられる。埴輪の大きさや配列の間隔などは，本調査で確認された埴輪列の状況と合致するものである。

葺石については，前方部で明らかに認められたようであるが，現在の墳丘上では明確に視認できる状態にはない。本調査では前方部第1段斜面の広い範囲が大きく削られたと判断されたため，葺石の残存状況は非常に悪いと推定される。第6トレンチ付近では比較的良好であったため，造出に近い位置で確認されたのかもしれない。

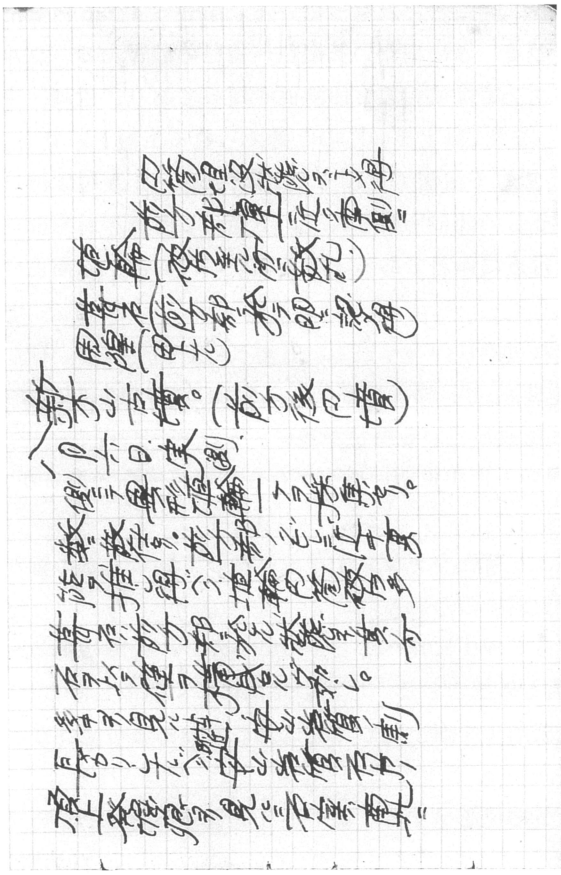
〔遺物〕　埴輪片が至る所に散乱していたようである。現在は，くびれ部付近で多少の埴輪片を認めるが，全体的にはそれほど顕著ではない。埋葬施設から勾玉，小玉（棗玉か），管玉が発見されている（第28図）。

調査の経緯　本参考地については、これまで大きな工事が行われることがなかったため、事前調査や立会調査が行われたことはなかった。

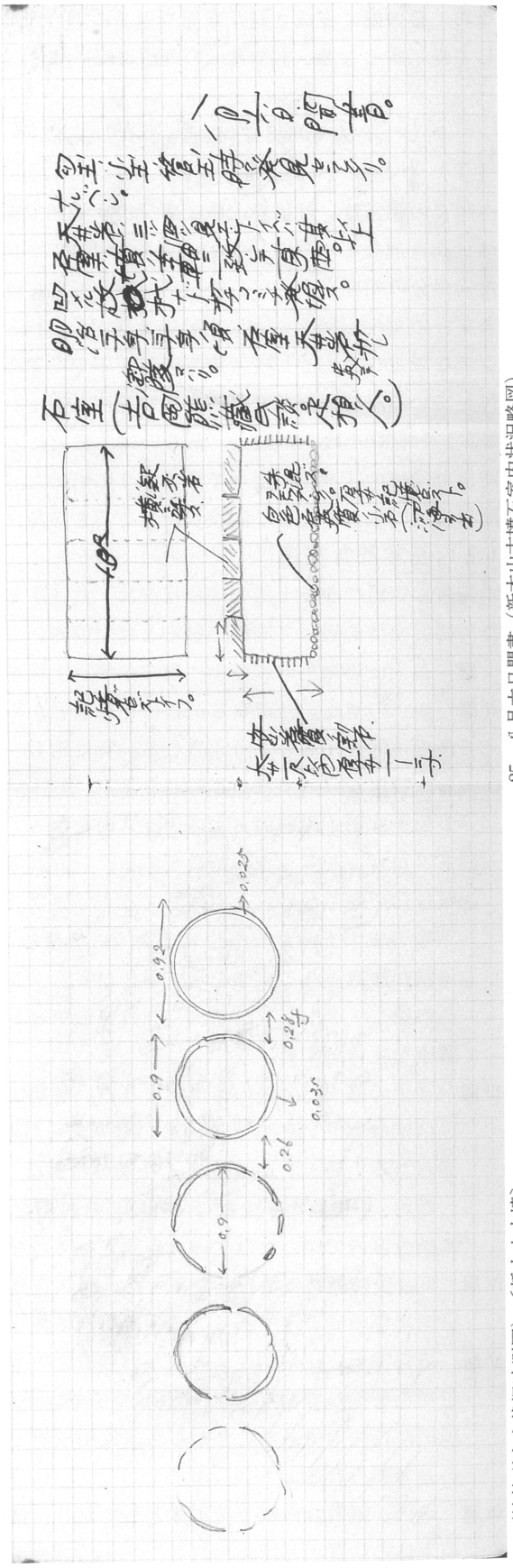
しかし、墳丘の東・西・南側の境界線沿いに設置されていた侵入防止用のコンクリート杭が、経年により多くの箇所で破損・倒壊してきたため、新たに土留板を伴う外構柵へ改修する必要が生じた。そのため、工事に先立ち事前調査を実施することで、遺構・遺物の残存状況等を確認して、適切な工法の検討に資するデータを収集することとなった。

調査は、平成22年10月15日～11月26日の期間で実施した。調査期間中には、陵墓管理委員の視察をいただきご指導・ご教示を賜った。また、葺石については後掲のとおり、奥田尚氏に調査いただいた。

また、当庁の調査と並行して、広陵町教育委員会により第9・10・11トレンチの延長線上の周濠部で調査が実施された。その際には、広陵町教育委員会文化



23.《22の続き》〔別所山古墳〕/新木山古墳（前方後円墳）



25. 八月六日聞書（新木山古墳石室内状況略図）

24.（埴輪列出土状況略測図）〔新木山古墳〕

第５図　三吉陵墓参考地　関係資料〔奈良県立橿原考古学研究所編2011〕

財保存センターの井上義光・名倉聡両氏に、調査所見を含め多くの御教示を賜った。

なお、その際に作成された図面や過去の調査所見についてもご提供いただき、本報告において一連の図面として提示するなど、本参考地の理解に反映することができた。記して感謝申し上げたい。　（清喜裕二）

1　トレンチの設定と基本的な層序

（1）トレンチの設定

本調査の範囲は、外構柵改修工事を行う範囲であり、墳丘北側の溜池に接する範囲は落水ができなかったため、調査対象となっていない。トレンチは12箇所を設定した（第4図）。おおむね墳丘を主軸で2等分した南半分の範囲を中心に、後円部の一部で北に回り込む。

まず、陵墓地形図をもとに主軸線を決定して、その線上にトレンチ断面がかかるように、第1・第11トレンチを設定した。そして、前方部前面中央を第1トレンチとして、墳丘裾に沿って西へ順次トレンチ番号を付している。後円部を北に回り込む範囲に第12トレンチが位置する。

なお、トレンチは主軸線上、あるいは主軸線に直交する位置にあたるトレンチでは長めに設定して、ある程度まで段築の状況等が把握できるように努めた。しかし、樹木の繁茂等の事情により、トレンチの規模や位置は現地の状況に応じて調整したところもある。

（2）基本的な層序

本調査で認識できた土層の堆積状況は、共通するところがあるものの、後述するとおり後世の改変が顕著なために、全体を通して同様であるとは言い難い。以下に土層の性格と特徴などを述べる。

Ⅰ層　表土。黒褐色の腐植土。現在の墳丘上面を覆う腐植土層である。

Ⅱ層　後世の盛土。含まれる遺物の年代などから、近世末頃と考えられる。具体的には、今池の造成期前後の可能性が高いと考えられる。特に第2～4トレンチと第6～9トレンチの範囲で顕著に認められる。特徴が共通するところもあるが、基本的にはトレンチごとで異なっている。第2～4・6・8トレンチは第1段斜面およびテラス面を覆っているもので、きめ細かい黄褐色～橙色の砂質土で、シルトブロックを多く含む特徴がある。一方、第9トレンチでは墳丘第2段斜面を覆っており、色調・土質は類似するが砂質土主体である点で異なっている。また、盛土そのものと考えられる土層（Ⅱa）と、下層の盛土上面が流出して2次的に堆積したと考えられる土層（Ⅱb）に区別できる。Ⅱb層は薄い堆積が複数重なる状態を示す場合が多く、Ⅱa層どうしの間に形成されている箇所もある。前方部前面の第1・2トレンチや、くびれ部の第8トレンチ付近に顕著である。きめ細かい黄褐色～赤褐色砂質土を主体とする。

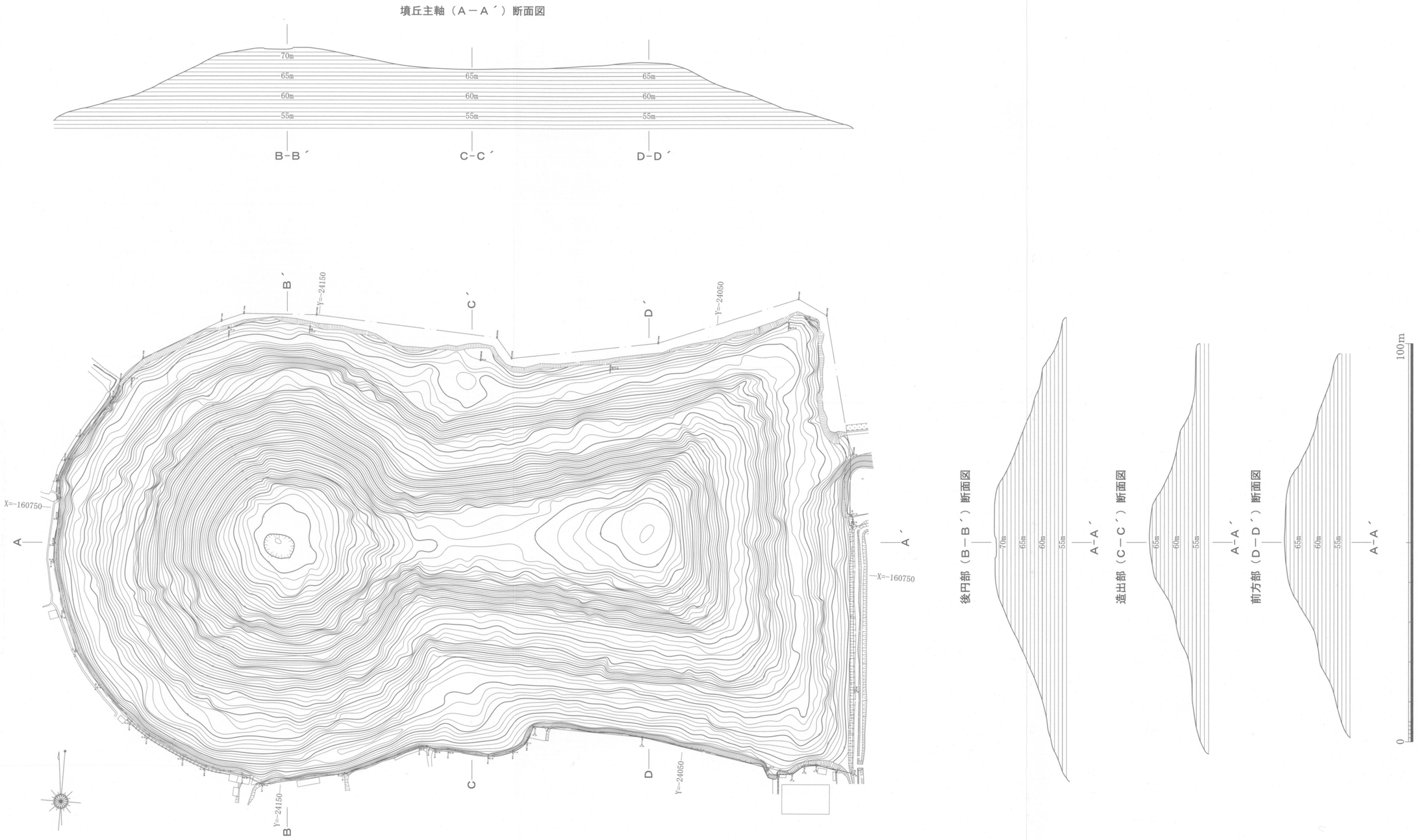
Ⅲ層　後世の盛土。今池の造成期より古い時期に行われた可能性のある盛土。Ⅱ層との時期差など、細かい区別は難しい。盛土そのものと考えられる土層（Ⅲa）と、盛土が流出して2次的に堆積したと考えられる土層（Ⅲb）がある。土層の特徴は、Ⅱ層と類似している場合が多い。

なお、中世遺物が少量ながら認められるため、Ⅲ層の下に中世期の盛土が存在する可能性があるが、本調査区内で明らかなものは確認されていない。

Ⅳ層　築造後に最初に墳丘面を覆った土層。自然流出により葺石やテラス面を薄く覆っている。きめ細かい明褐色の砂質土である。遺物は築造に伴う埴輪や土器に限られる。

Ⅴ層　墳丘盛土。比較的きめの細かい砂質土を主体とする。地山に比べるとやや軟らかい。色調は褐色～黄褐色を呈しており、第11トレンチではオリーブ色も確認される。地山の特徴によく類似しており、現地が丘陵地であることからも、地山成形で生じた掘削土を盛土として使ったものである可能性が高いと考えられる。

Ⅵ層　地山。堅緻な砂質土を主体としており、黄橙色～黄褐色を呈する。第1・9トレンチではオリーブ色主体の粘質土が認められる。　（清喜）



第６図　三吉陵墓参考地　墳丘平面図・断面図（1/1,000）

2　各トレンチの状況

（1）墳丘の現況

各トレンチの記述に入る前に、墳丘全体の現況についてみておきたい。本調査に併せて、新たに業者委託のＴＳ測量により原図のスケール1/200、等高線間隔25㎝の現況測量図を作成した（第６図）。これにより、墳丘の現況を細かく把握できるようになったといえよう。

一見して３段築成の前方後円墳であることがわかる。段築の状況は北側面でより明瞭である。各テラス面を明瞭に確認できる。一方、南側面は、墳丘第１段を中心に等高線の乱れが認められる。とくに後円部は広い範囲で乱れが顕著である。墳丘南側は、周濠部が早くから耕作地として利用されていることから、これらの開墾等に伴って、墳丘の南側面に改変が加えられたのかもしれない。

細かくみていくと、前方部南側面の第１段テラス面が不明瞭となっている。両コーナーも巡回路が設定されていることなどから、明瞭な角は失われている。後円部ではさらに乱れが顕著となり、第３段斜面の上位から等高線の乱れが激しく、第１・２段テラス面ともに、所々で途切れるような状況となっている。

裾部に関しては、北側面の大半が今池に面していることもあり、墳丘斜面の荒れている南側面に比べても、北側面の傷みの方が顕著といえる。特に前方部前面裾を比較すると今池の堤を挟んで、北側の裾が本来の裾より大きく後退している。南側面の墳丘第１段の幅と比較すると、北側面は2/3程度となっており、今池に面した北側面の裾部全体が同様の状況にあると推定される。また、南側面の裾部では、前方部南東隅に民家が迫っており、明らかに墳丘が削られている状況にある。また、後円部では第９トレンチの西10ｍ付近から第11トレンチの北15ｍ付近の範囲で、開墾により墳丘裾が削られているような状況を認めることができる。

なお、後円部頂のやや南寄りには、長軸約7.5ｍ×短軸約５ｍの楕円形のくぼみが認められる。後述する勾玉などは、ここから出土したと考えられている。

（2）前方部

第１トレンチ（第７図、図版14）　墳丘主軸上にあたり、前方部前面の中央に位置する。主軸上であるため、ある程度の墳丘構造を把握する目的で、長さ14ｍ×幅２ｍの規模で設定した。最終的には北壁沿いに東へ長さ１ｍ×幅0.8ｍの規模で境界線際まで拡張した。トレンチの西端付近は現状でテラス状の平坦面が南北に続いており、墳丘第１段テラス面が確認されることが予想された。調査の結果、墳丘第１段斜面と第１段テラス面を反映していると考えられる面を検出した。

層位は、表土（Ⅰ）がトレンチ表面を覆い、西端には、陵墓地形図でも確認される墳丘北側の溜池に通じる浅い溝が認められる。その下に後世の盛土（Ⅱa）が確認できる。これら３つの盛土の間には、特に裾付近で２次堆積のような薄い土層が確認されている（Ⅱb）。このことから、盛土は一度に行われたのではなく、２次堆積の間層を挟みつつ、多少の時間差をおいて行われたことが推定される。ただし、旧表土は形成されていないことから、長期間を見積もることはできないと考えられる。

裾付近のⅡｂ層には転落してきたと思われる石材が含まれていたが、標高53～54ｍの間には２ｍ×２ｍの範囲で石材が集中していた。ある程度の整った面で検出されたため、一見すると葺石のようにも見えるが２次堆積土上に広がっているため、本来の葺石とはいえない。また、斜面上の盛土は比較的薄いものであるが、標高55ｍ以上で認められるⅡａ層は、上面がほぼ水平な地山（Ⅵ）の上に約１ｍの厚さで堆積している。均質な土層で一気に盛土されたと考えられる。シルトブロックを多く含む堅緻な土層である。

地山（Ⅵ）は、テラス面と墳丘裾付近で確認した。テラス面付近ではほぼ水平に検出されたうえ、標高は約55ｍである。後述する第５トレンチの埴輪列検出レベルとほぼ同じであることから、本来のテラス面である可能性が考えられた。しかし、５ｍを超える幅で平坦面が確認されたにもかかわらず、埴輪列が確認できなかった。埴輪列がさらに西壁の奥にあると考えることもできようが、Ⅵ層直上に第９トレンチのテラス面で認められたような築造後間もない段階での流土も確認できないことから、本来のテラス面は多少の削平

を受けていると判断しておきたい。この場合、埴輪列の遺存についてもやや否定的な見方となる。しかし、第５トレンチの埴輪列検出レベルとほとんど差がないことから、本来のテラス面の高さに近いものと考えられる。

墳丘裾は、現状ではトレンチ東端付近である。最終的に断割りを行ったトレンチ東端床面で地山は斜面から水平面に移行する兆候がみえる。削平の程度は不明であるが、本来の墳丘裾の位置と現状の位置は、大きくはずれないと考えられる。

なお、残存する墳丘裾とテラス面の比高は約 3.5 ｍである。多少の削平が考えられるものの、テラス面が一面地山であることから、少なくとも墳丘第１段の多くの範囲は地山成形によると判断できよう。斜面の角度は削られているものの比較的一定であり、その角度は約 25 度を測る。

遺構は、築造時のものは確認されなかった。先述のとおり、第１段テラス面とおぼしき平坦面も第１段斜面も先述のとおり、築造時の状態を留めているとはいえない。結果的には、本トレンチにおける本来の墳丘外表面はすべて削平されていると考えられる。

遺物は、盛土、流土内から円筒埴輪、土師器の破片のほか、陶磁器、瓦や瓦器の破片が出土している。

第２トレンチ（第８図、図版 15）　前方部前面の第１トレンチと第３トレンチの中間付近に位置する。長さ５ｍ×幅２ｍの規模で設定したが、既設の侵入防止柵設置部分にあたる幅約 0.6 ｍについては倒壊の虞があったため、掘り下げていない。トレンチの設定箇所周辺は墳丘斜面の乱れが顕著であったため、改変の加わっていることが予想された。調査の結果、本来の墳丘斜面は失われており、削られた後の地山面を検出した。

層位は、墳丘裾に近い場所であり、表土（Ⅰ）の下に流土が複数堆積している状況が認められ（Ⅱb)、第１トレンチの状況と類似している。流土の起源となっている盛土などは特定できない。地表面から約 0.6 ｍで地山面に到達するが、流土であるⅡｂ層が直接地山上に堆積しているため、本来の墳丘斜面は既に削られていると判断できる。よって、遺構は残存していない。トレンチ東端の長さ 0.6m ×幅２ｍの範囲では、断面で地山が水平に移行している状況が認められる。

遺物は、盛土、流土内から円筒埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。

第３トレンチ（第９図、図版 15）　前方部前面の南端に位置する。現地の状況に合わせて、長さ４ｍ×幅 2.5 ～３ｍのやや不整形な台形として設定した。トレンチの南側には隣接住宅が迫っており、トレンチ東側とともに墳丘裾付近は崖状を呈している。調査の結果、本来の墳丘斜面は失われており、削られた後の地山面を検出した。

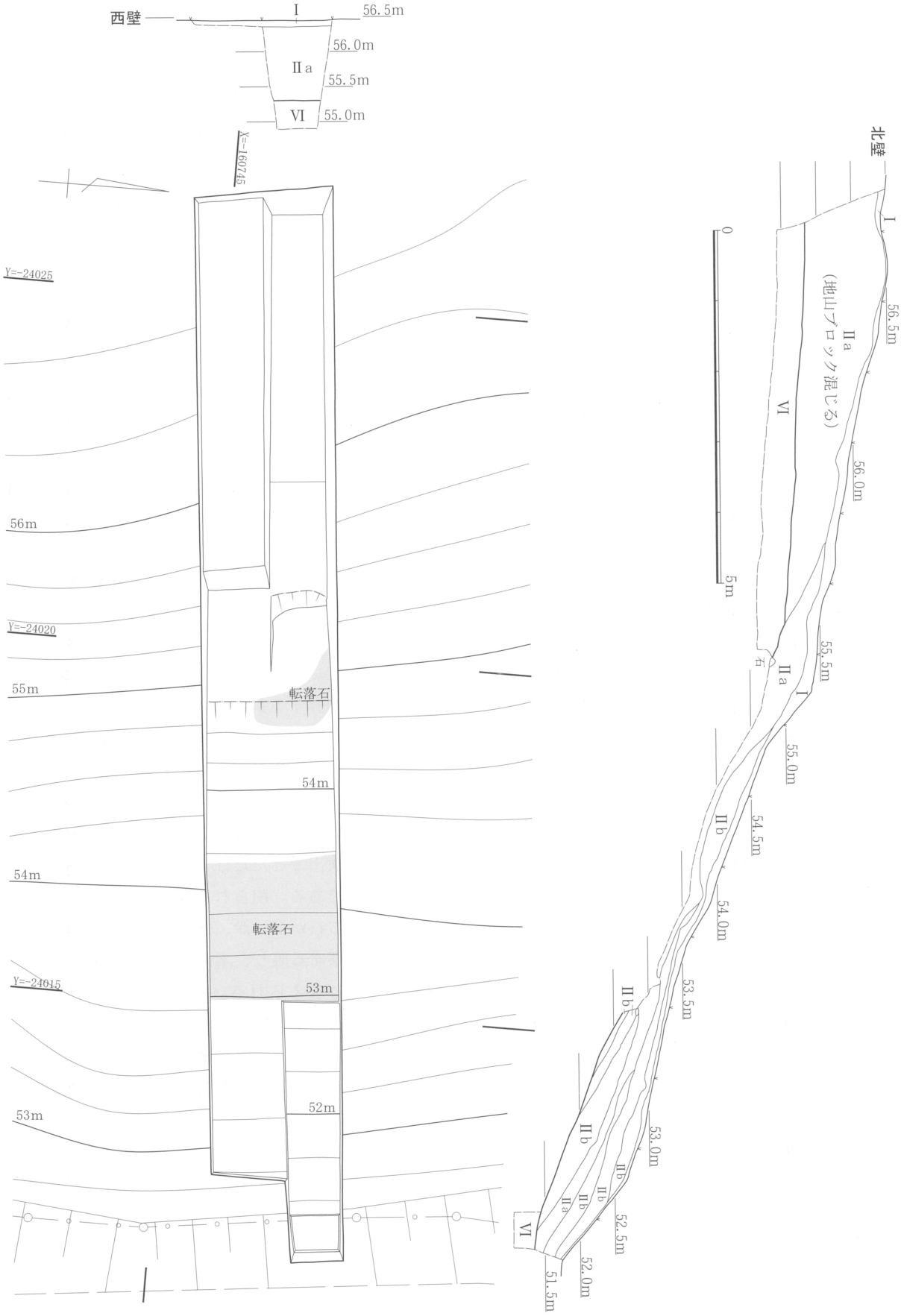
層位は、表土（Ⅰ）の下に後世の盛土と考えられる土層が認められるが（Ⅱa)、検出範囲が狭く流土である可能性も考えられる。その下に流土と考えられるⅡｂ層が認められる。上方の盛土が流出してきたものであろう。Ⅱｂ層は墳丘盛土（Ⅴ）や地山（Ⅵ）上に堆積しているが、墳丘盛土、地山上面ともに葺石などは残存していなかったため、既に本来の墳丘斜面は削られた後にⅡｂ層が堆積したと考えられる。

遺構は、墳丘盛土、地山上面に 0.6 ～ 0.4 ｍの範囲で石が集積しており、陶磁器類が石の間に見られた。

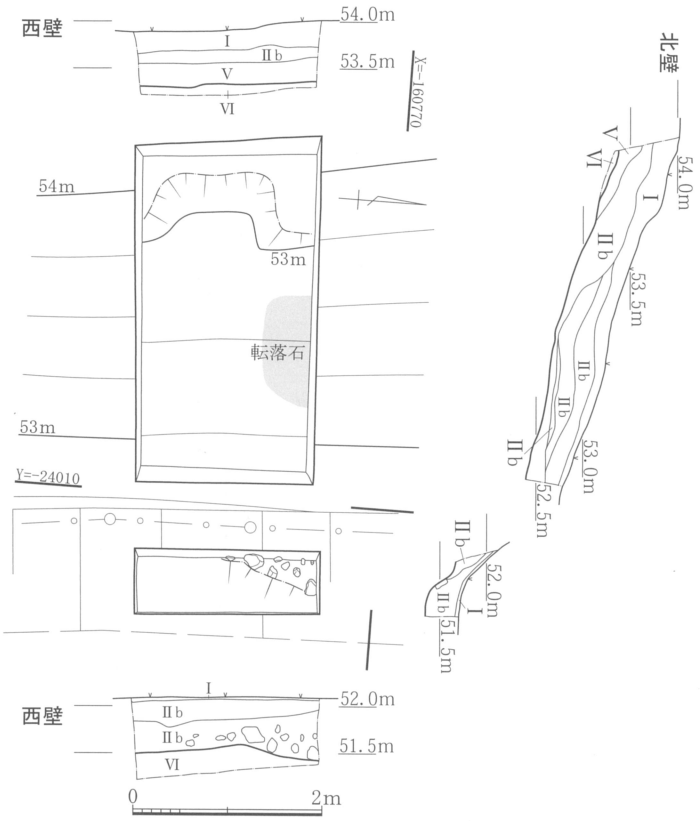
遺物は、墳丘盛土、地山上のⅡｂ層で埋まっていた集石範囲内を中心に、円筒埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。埴輪の割合が少ない。

第４トレンチ（第 10 図、図版 16）　前方部南側面東寄りに位置する。トレンチ周辺は傾斜が非常に緩やかである。土堤状の高まりが周濠側に突出しているが、これが本来の遺構であるか否かを確認するために、長さ 7.6 ｍ×幅 1.6 ～ 3.2 ｍで設定した。裾に向かう南側が深くなったため全面の掘り下げは行わず、最終的には長さ 7.6 ｍ×幅１～ 1.6 ｍの範囲を地山面まで掘り下げた。調査の結果、削られた地山面とトレンチ南端で葺石を検出した。

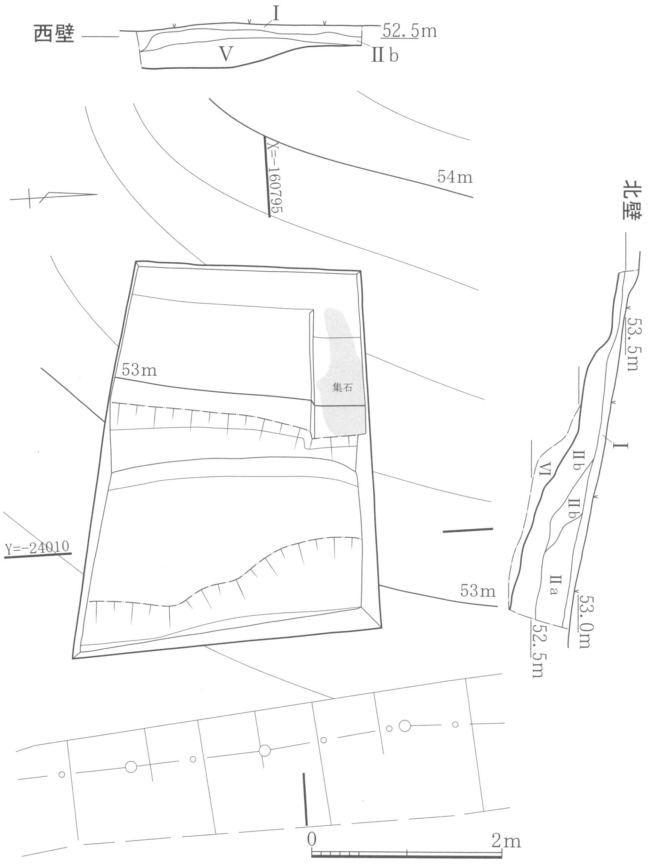
層位は、表土（Ⅰ）の下に、盛土（Ⅱa) と流土（Ⅱb) が堆積する。北壁周辺のⅡｂ層は細かい層状の堆積が認められることから流土と考えて問題ないが、その他は流土か盛土かの判断が難しい。いずれにしても



第７図　三吉陵墓参考地　第１トレンチ平面図・断面図（1/80）



第８図　三吉陵墓参考地　第２トレンチ平面図・断面図（1/80）



第９図　三吉陵墓参考地　第３トレンチ平面図・断面図（1/80）

厚さがそれぞれ0.2 m～0.8 mを測り、比較的大きな単位で確認できる。また、各層の堆積にかかる時間経過は不明であるが、北壁付近では明らかな流土として認識できることから、そのⅡb層を挟む上下の層は少なくとも連続して形成されたものではないことがわかる。同様に、Ⅱb層が削られた後、表土直下のⅡa層が形成されていることから、両者にも若干の時間差を想定することが可能であろう。いずれにしても、突出部のように見える地形は、少なくともトレンチ南端において厚さが２mに及ぶ、後世の盛土が堆積することにより作られていることが判明した。

もっとも下では墳丘盛土（Ⅴ）を検出した。北壁付近では断面をみるとわかるように、東に向かってやや深めに削られている。トレンチ南端で葺石が検出されたが、検出面である標高52.1 m付近から上の斜面が、葺石も含め大きく削られている。葺石を覆う土層がⅢa層である。残存する葺石が確認できたことから、現状突出部に見える地形は墳丘とは無関係であることが明らかである。

遺構は、先述のとおり葺石を確認している。しかし、トレンチ南端でわずかに検出できただけであるので、詳細は不明である。削られた際に動いたと考えられる石が多いが、壁際の石の並びなどを観察する限り、本来の状態を維持していると考えられる。長さ10～20㎝を測る石材が主体を占める。

遺物は、円筒埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、磁器、瓦の破片が出土している。（清喜）

第５トレンチ（第11図、図版16）

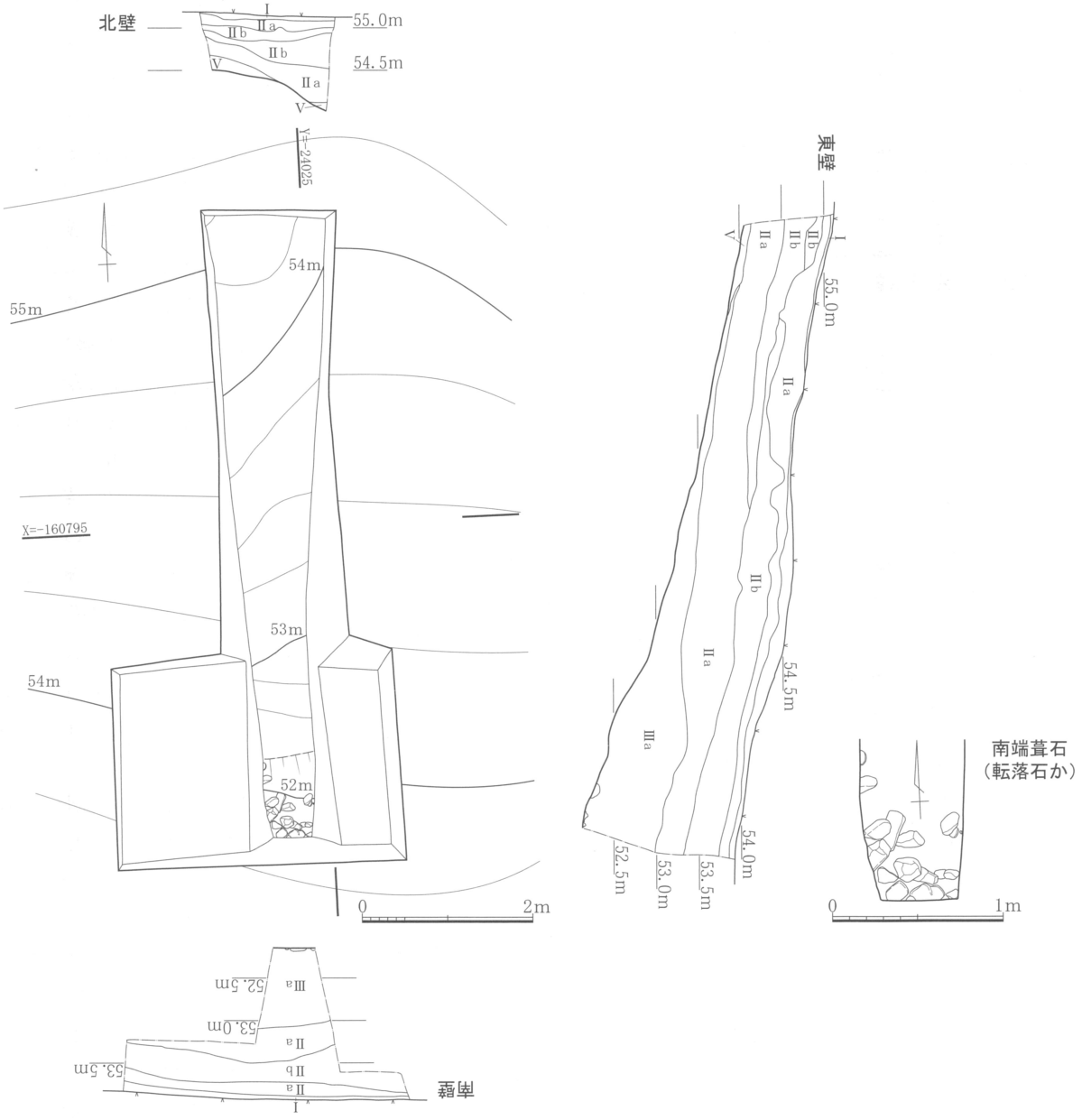
前方部南側面に位置する。トレンチ周辺は第４トレンチと同様に傾斜が非常に緩やかである。現地の状況に合わせて、長さ6.8 m×幅２mで設定した。

トレンチ北側の表土直下で円筒埴輪列が検出されたため、検出面までの掘削を

行った。最終的には、埴輪列下層の状況および境界際の地下状況を確認するために、東南端を裾側に長さ1m×幅0.5mの規模で拡張し、東側断ち割りで墳丘盛土の一部を掘削した。

層位は、表土(Ⅰ)の下に流土(Ⅱb)が2層、流土下に墳丘盛土(Ⅴ)が2層、その下に地山(Ⅵ)が堆積する。流土上層は厚いところで0.4m、流土下層は厚いところで0.3mを測る。流土内には、葺石の転落石の可能性がある石が少量入る。流土下の墳丘盛土は、上・下層ともに約0.2m堆積が認められるが、葺石が検出されなかったことや傾斜角度が緩やかであることから、後世の削平や崩壊のため、本来の斜面形状をとどめていないと考えられる。最下層の地山は、トレンチ北側で南へ急に下がるが、そこからは南へ緩やかに下っている。

遺構は、先述のとおり円筒埴輪列を確認している。現状で標高約55mに位置する。埴輪は全部で4個体である。西から3番目と4番目の埴輪の間は、1個体分ほど空いている。埴輪列が全体的に南側へ大きく傾いていることから、ここは古墳築造当初より埴輪が無かったのではなく、墳丘の崩壊などにより埴輪が無くなったと考えられる。



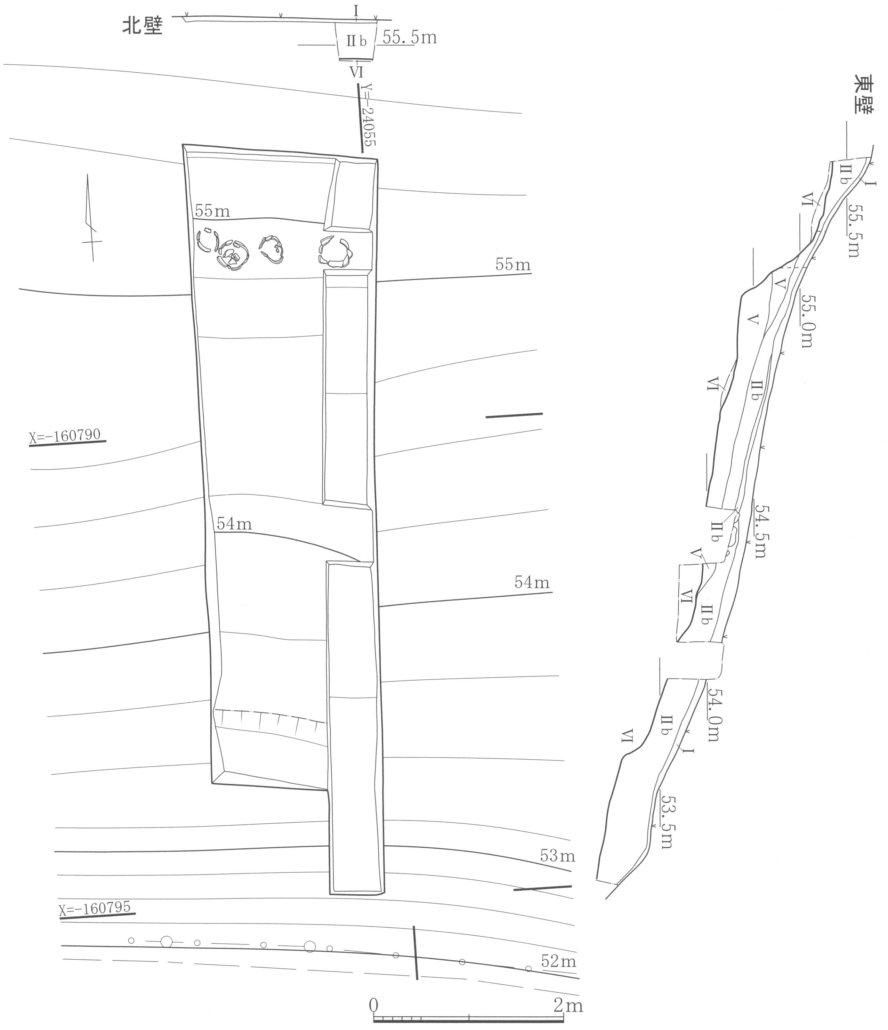
第10図　三吉陵墓参考地　第4トレンチ平面図・断面図(1/80、1/40)

また、埴輪列は、各個体が直線では並ばず、それぞれが本来の位置にないことは明らかである。ゆえに、本トレンチで検出した埴輪列は、築造当初の位置にはなく、多少なりとも移動して現在の位置となったものである。葺石は、検出されなかった。

遺物は、円筒埴輪のほか、磁器、瓦の破片が出土している。（横田真吾）

（3）くびれ部・造出

第6トレンチ（第12、13図、図版17、18） 南側造出と前方部南側面の屈曲部付近に位置する。屈曲に沿って「く」字形の形態となっている。長さ3.5 m×幅は墳丘側で前方部・造出とも8 mの規模で設定した。最終的には、前方部側東端を長さ1.8 m×幅0.6 m、造出側南端を長さ1.2 m×幅0.6 mの規模で拡張して、境界際の葺石の残存状況を確認した。前方部と造出の接合部にあたる墳丘第1段斜面にあたる範囲であるが、調査の結果、前方部と造出それぞれに葺石の残る第1段斜面を検出した。



トレンチ平面・断面

埴輪列

第11図　三吉陵墓参考地　第5トレンチ平面図・断面図（1/80、1/20）

層位は、表土（Ⅰ）の下に、盛土（Ⅱa）と流土（Ⅳ）が堆積する。Ⅱa層からは近世末の染付が出土しており、江戸末期の盛土である可能性が高い。シルトブロックが目立つが全体に均質な粘質土である。一気に盛土されているような状況である。Ⅳ層は、葺石を直接覆う流土である。標高53 m付近で上面が平坦となっており、堆積後改変が加えられることがあったと考えられる。本トレンチでは、確実に地山と認識できる土層は検出されていない。

遺構は、墳丘第1段斜面の葺石を検出した。詳細は後述することとして、ここでは概略を述べておきたい。地形的に奥まっている屈曲部で葺石の残存状態は良好であるが、特に造出の南側は石の失われている範囲が広い。樹根の影響が強く、失われていないまでも動いていると考えられる石

第12図　三吉陵墓参考地　第６トレンチ平面図・断面図（1/80）

が多く、葺石面に凹凸が目立つ。検出範囲の最高地点は標高54.2 m付近である。第5トレンチの埴輪列の高さが標高55 m付近なので、第1段斜面の天端までは到達していない。一方、最低地点は標高52 m付近である。葺石はまだ下に続くと考えられるが、境界線の外側に出てしまうので裾までは確認できない。墳丘斜面の傾斜は約25度である。

遺物は、盛土(Ⅱa)からは、円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。磁器の中には近世末の磁器が含まれており、盛土の時期を考える材料となる。また、葺石を覆う流土中(Ⅳ)からは、円筒埴輪、形象埴輪の破片のほか、土師器甕、高杯の破片が出土している。造出上面から転落してきたものであろう。

第7トレンチ(第14図、図版19、20)　翼状を呈する南造出のコーナー部分に位置する。長さ2.5 m×幅5 mの規模で設定した。葺石が検出されたことから、残存状況を確認するために、最終的に西南隅を裾側に長さ0.8 m×幅0.6 mの規模で拡張した。造出上面の遺構と造出斜面の検出が予想されたが、調査の結果、造出上面に作られたと考えられる埴輪の埋設遺構と残存する造出斜面を検出した。

層位は、表土(Ⅰ)の下に、盛土(Ⅱa)と流土(Ⅱb)が認められる。盛土は、第6トレンチのⅡa層と一連のものであると考えられる。流土は、後述する埴輪の埋設遺構を覆っている。そして、これらを除去すると遺構検出面となるが、これは墳丘盛土(Ⅴ)と考えられる。標高54 m付近で平坦面が認められるが、周囲には流出した状況や削られた痕跡が認められるため、本来の造出上面はトレンチ内には残存していない可能性が高い。また、標高53 m付近から墳丘裾に向かって急激に下っていくため、隣接耕作地の開墾などにより削られていると考えられる。

遺構は、トレンチ北東隅付近で埴輪の埋設遺構を検出した。この遺構についての詳細は後述したい。トレンチ南西一帯では、葺石を検出した。東寄りの範囲ではすべて失われている。高さはおおむね標高53 m～54 mの範囲で認められる。一見すると疎らではあるが、明瞭な石の並びが確認できる箇所もあるため、石の移動や転落はあるものの、ある程度本来の葺石を反映していると判断できる。

遺物は、埴輪の埋設遺構から円筒、蓋形、朝顔形(壺形)埴輪の破片が出土している。流土や盛土からは、円筒埴輪、形象埴輪、土師器の破片のほか、磁器や瓦の破片が出土している。

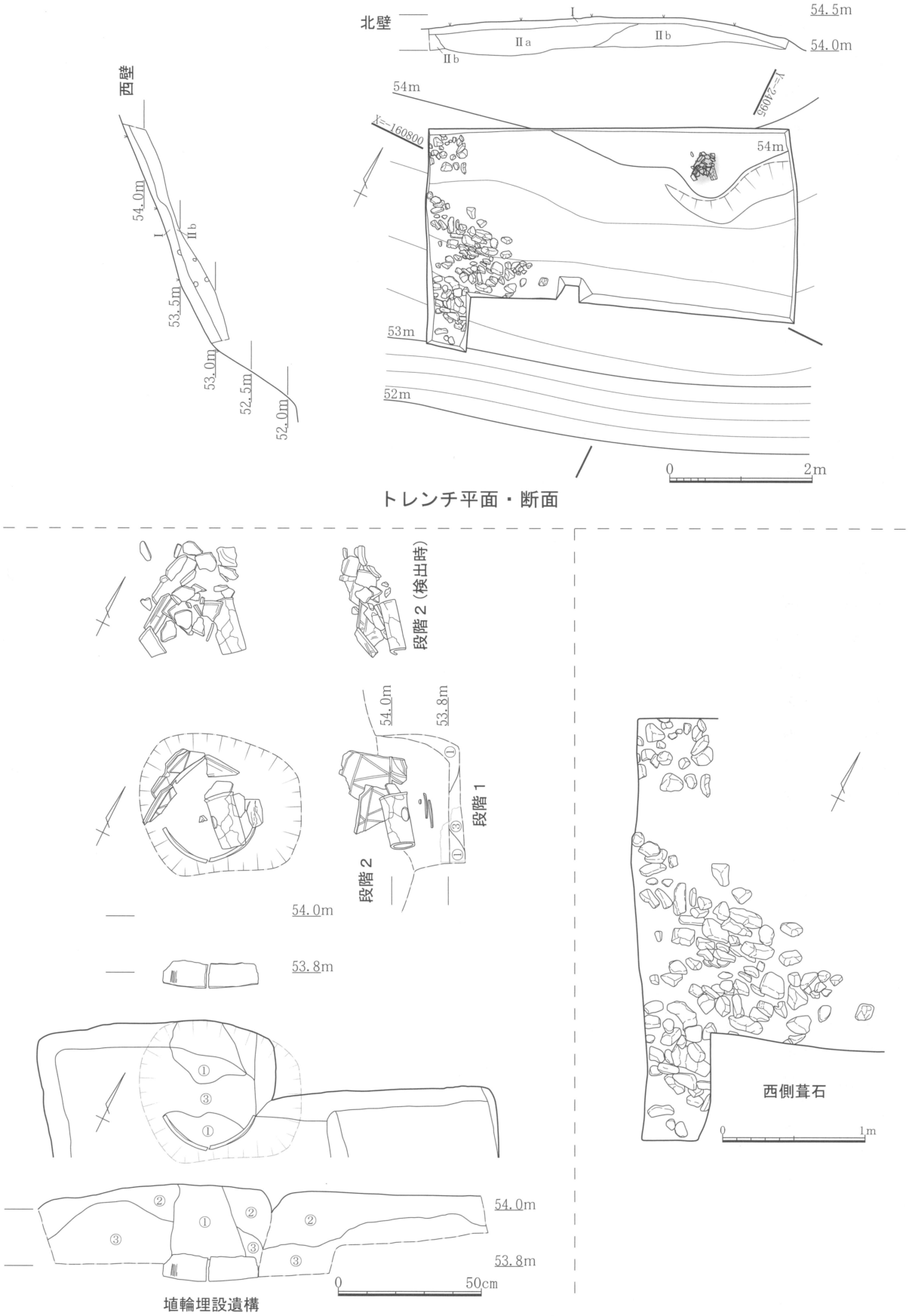
第8トレンチ(第15図、図版21)　後円部と南造出の接合部付近に位置する。長さ5 m×幅5 mの規模で設定した。北壁の一部は巨大な樹根が存在するため一部掘り残している。最終的に、境界際の葺石の状況を確認するために、南東隅を裾側に長さ1 m×幅0.5 mの規模で拡張した。くびれ部の状況が判明することが予想されたが、調査の結果、くびれ部墳丘第1段斜面を検出した。

層位は、表土(Ⅰ)の下に、盛土(Ⅱa)と流土(Ⅱb)が交互に堆積するような状況が認められ、厚さが1 mに及ぶ。特に北壁中央付近では細かい2次堆積が認められるが、これは下がくびれ部付近であるため、微地形としては谷部にあたっていると考えられ、流土が溜まりやすいことが要因かとも思われる。北壁をみると、Ⅲb層から掘り込みが認められるなど、堆積の途中にも人為的な改変が加わっていることがわかる。墳丘裾に近づくと葺石が残存するが、その状況から標高53 mより上位では、本来の墳丘斜面が大きく削られていると考えられる。各盛土の間に旧表土は見られず、比較的短期間のうちに盛土されたと考えられる。

遺構は、くびれ部の墳丘第1段斜面の葺石を検出した。くびれ部最奥部の裾が検出されており、裾の標高は52 m付近となる。詳細は後述するが、裾付近は他のトレンチの葺石では見られない大形の石が使用されている。葺石の方向を見る限り、くびれ部最奥部からいったん南に裾が延びるため、石の方向は南北方向である。一方、拡張区の葺石の方向は東西である。大きく見ると翼状ではあるが、くびれ部付近で1辺存在する可能性があり、造出の西側にもコーナーをもつ可能性が高い。非常にいびつな台形という表現もできるような形態となる可能性がある。

遺物は、盛土、流土内から円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。　(清喜)

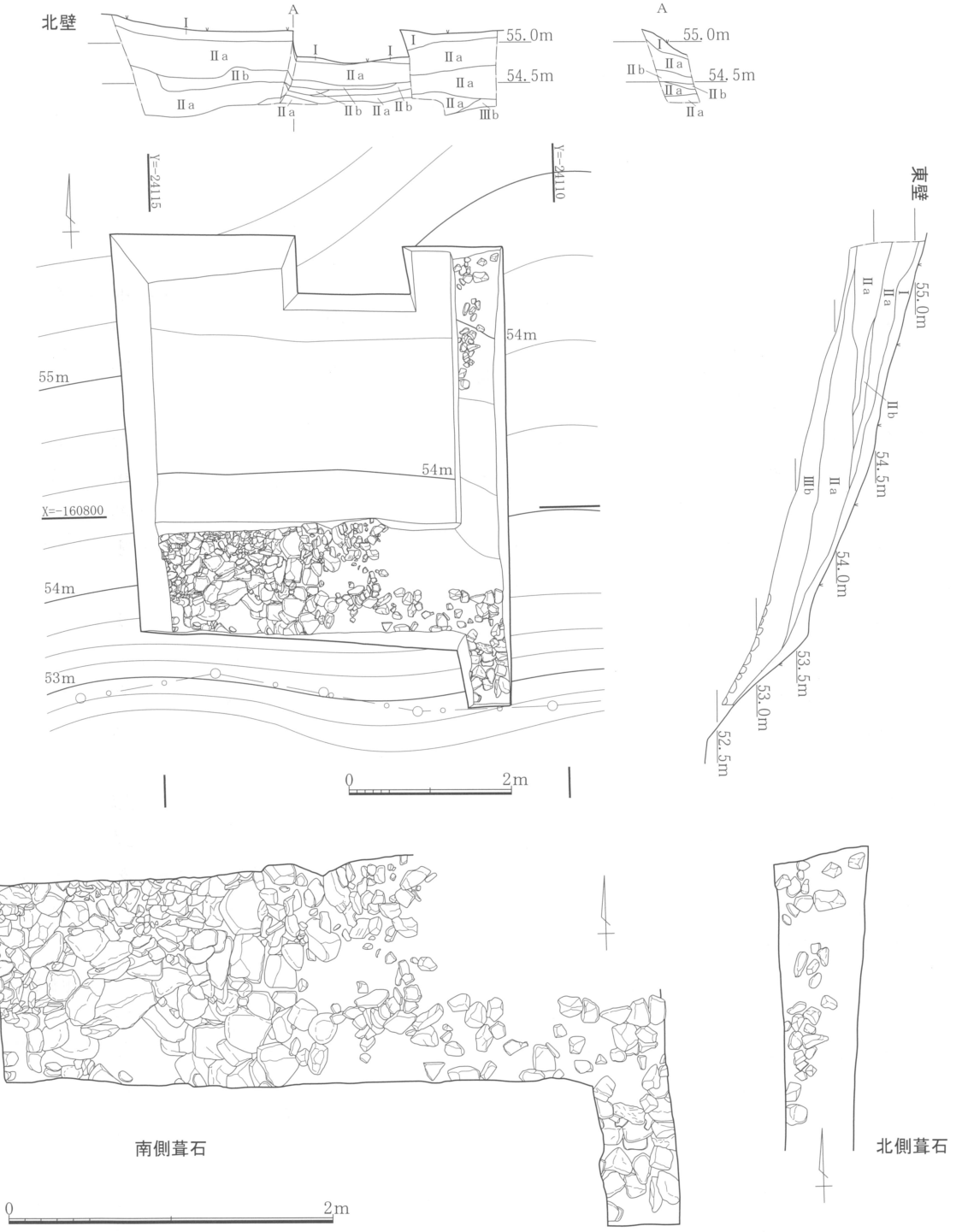
第13図　三吉陵墓参考地　第６トレンチ平面図（1/40）



第14図　三吉陵墓参考地　第７トレンチ平面図・断面図（1/80、1/40、1/20）

（4）後円部

第９トレンチ（第 16、17 図、図版 22、23）　後円部の南側中央に、墳丘主軸と直交するように位置する。長さ 16 m×幅２mの規模で設定した。東側半分の掘削により、墳丘第１段目斜面、第１段目テラス、第２段目斜面を検出したため、西側半分の流土と盛土の大半を掘り残している。最終的には、境界際の葺石の状況を確認するために、南東隅を裾側に長さ 0.5 m×幅１mの規模で拡張した。ここにも葺石が残存していると予想した通り、比較的良好な残存状況の葺石を検出した。



第15図　三吉陵墓参考地　第８トレンチ平面図・断面図（1/80、1/40）

層位は、表土（Ⅰ）の下に、流土（Ⅱb）、盛土（Ⅱa）、流土（Ⅲb）、盛土（Ⅲa）、流土（Ⅳ）と、流土と盛土が交互に堆積するような状況が認められ、厚さが1.2mに及ぶ。葺石直上の流土（Ⅲb）は、拳大から人頭大の礫を多量に含み、それらの礫は、葺石の転落石である可能性が高い。トレンチ南裾に近づくと葺石が残存するが、その状況から標高54.5mより上位では、本来の墳丘第1段目斜面が削られていると考えられる。第1段目テラスは、地山の段差を解消するように、墳丘盛土（Ⅴ）で成形されている。

遺構は、墳丘第1段斜面の葺石、第1段目のテラスと円筒埴輪列、第2段目の葺石を検出した。葺石について、第1段目斜面の葺石は、トレンチ外まで続いており、基底石は検出されていない。第2段目斜面の葺石は、基底石より斜面上半まで検出しているが、斜面は途中で削平を受けている。ゆえに、第2段目のテラス状に見える部分は、墳丘本来の形状では無い。

葺石については、1段目斜面と2段目斜面上半と比べた場合、2段目斜面基底石より下半は、人頭大の明らかに大きな石材を使用している。墳丘斜面の角度については、残存部分で計測して、第1段目が31度、第2段目が28度となっている。第1段目のテラスについては、標高約56.2m、現存長が約4.5mであるが、第1段目斜面の傾斜角度から考えて、本来は約6.8mあったと考えられる。

円筒埴輪列については、円筒埴輪3個体を検出した。埴輪が全体的に南側へ傾いていること、崩れた墳丘盛土内にも埴輪片が含まれることから、本来の位置より多少なりとも南へ移動していることは明らかである。ゆえに、本トレンチの円筒埴輪列は、5トレンチのものと同様、厳密には築造当初の位置には無い。

円筒埴輪列の埴輪は、検出時に第1段目突帯が既に無い状態であったが、接合した結果、第1段目突帯まで復元出来た。ただし、突帯は摩滅によって著しく低くなっており、これは埴輪が樹立されてから、しばらく突帯部分が露出していたために、流土等によって削られたものと考えられる。

遺物は、盛土および流土内から円筒埴輪片のほか、表土より近世の磁器、瓦の破片が出土している。

第10トレンチ（第18図、図版4、24）　後円部の南西側に位置する。長さ5m×幅2mの規模で設定した。墳丘第1段目斜面、第1段目テラス、円筒埴輪列を検出した後、盛土と地山の相違を確認すべく、南東側の断ち割りを行った。最終的には、境界際の遺構残存状況を確認するため、南東隅を裾側に長さ2m×幅0.5mの規模で拡張したが、葺石等は検出されなかった。

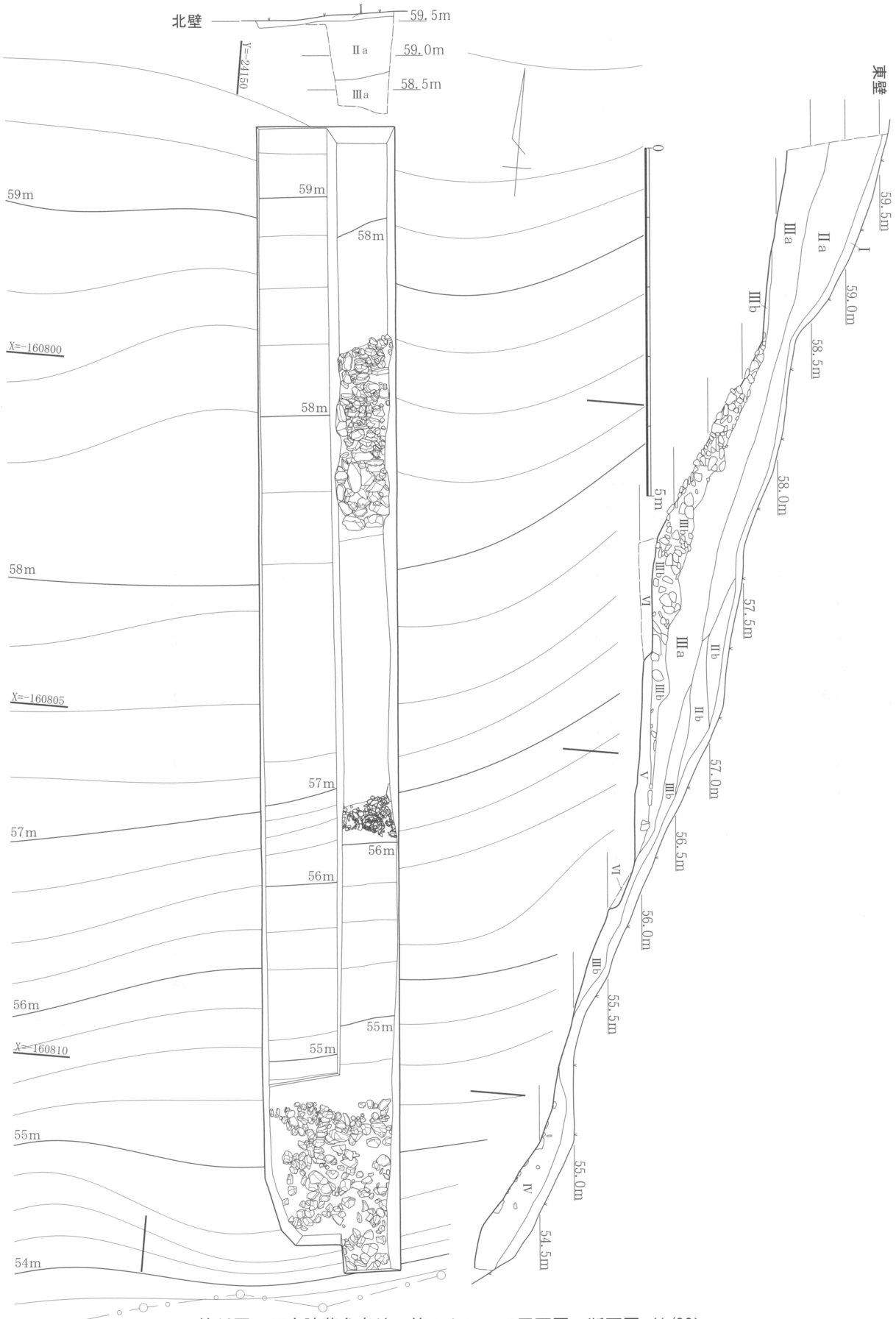
層位は、表土（Ⅰ）の下に、流土（Ⅱb）、流土（Ⅲb）、流土（Ⅳ）と、流土が順に堆積するような状況が認められ、厚さは約0.5mに及ぶ。流土（Ⅲb）は、溝状の掘り込みの埋土である。第1段目テラスは、地山（Ⅵ）の上に埴輪を並べた後、墳丘盛土（Ⅴ）で埴輪の1段目突帯まで埋めて成形している。地山は、上層より粗砂、シルト、粗砂、中粒砂というように、粗い砂と細かい砂の互層になっている。同様の地山堆積状況は、第12トレンチの断ち割りでも認められる。

遺構は、墳丘第1段斜面、第1段目のテラスと円筒埴輪列を検出した。墳丘第1段目斜面には、葺石は残存していなかった。墳丘斜面の角度については、現状で計測して、第1段目が25度となっている。斜面に葺石が全く残存していないこと、第9トレンチの第1段目傾斜角が31度という数字であることから考えて、墳丘第1段目斜面は、本来の形状を全くとどめていないと考えられる。第1段目のテラスについては、標高約56.3m、現存長が約2mである。

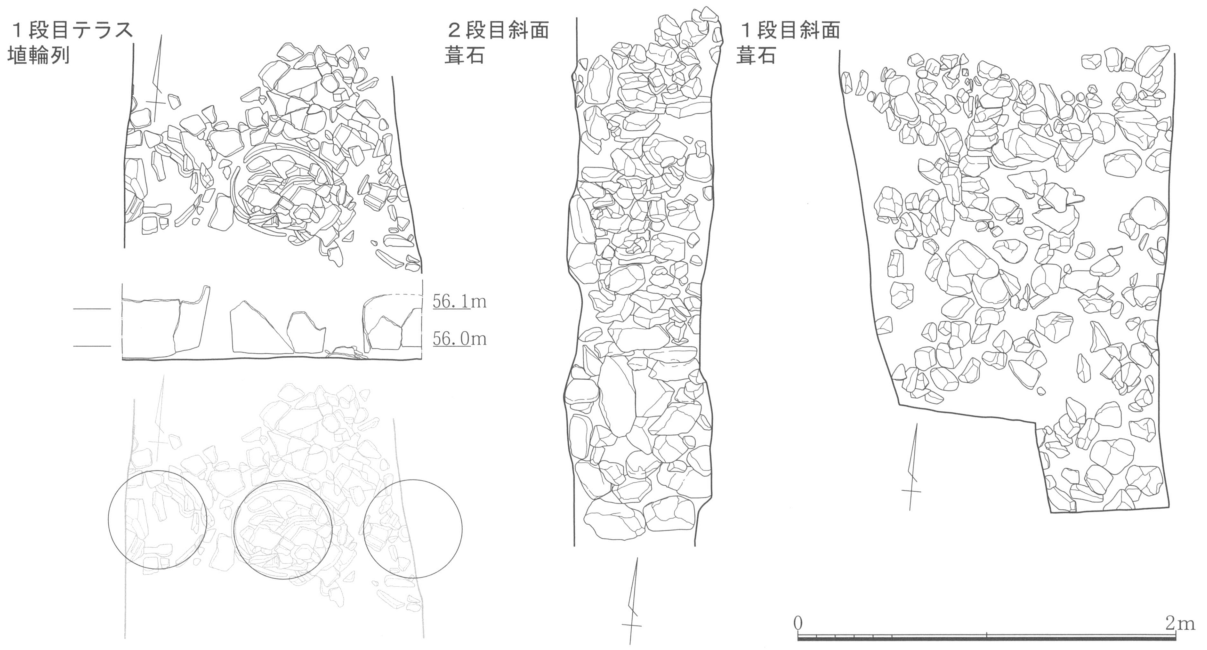
円筒埴輪列については、円筒埴輪6個体を検出した。埴輪が全体的に直立していること、直線的に並ぶことから、樹立当初の位置にあることは明らかである。第5トレンチ、第9トレンチの埴輪列は、本来の位置を保っていないため、樹立当初の位置を保っているのは、第10トレンチの埴輪列のみである。

埴輪の据付については、据付穴ないし布掘りが確認出来ないことから、先述した通り、地山上に埴輪を並べた後、墳丘盛土で第1段目突帯まで埋めたものと考えられる。埴輪内部の埋土上面、ほぼ第2段目突帯の位置で、多数の埴輪片を検出したが、埴輪内部の埋土からは、埴輪片や石などは検出されなかった。埴輪内部に土を充填した痕跡も確認出来なかったが、埋土に遺物が含まれないことから、この埋土は埴輪樹立当初からのものの可能性がある。

遺物は、流土内から円筒埴輪、朝顔形埴輪片のほか、表土から磁器、瓦の破片が出土している。　（横田）



第16図　三吉陵墓参考地　第９トレンチ平面図・断面図（1/80）



第17図　三吉陵墓参考地　第９トレンチ埴輪列・葺石平面図（1/20）

第 11 トレンチ（第 19 図、図版 25）　墳丘主軸上にあたり、後円部中央に位置する。第１トレンチと同様に墳丘構造をある程度把握するために、長さ 14 m×幅２mの規模で設定した。最終的には南壁沿いに長さ 0.8 m×幅 0.6 m拡張して、境界際の状況を確認した。周辺の地形から墳丘の第１・２段斜面、第１段テラス面にあたることが予想されたが、調査の結果、第１段テラス面と第２段斜面を検出した。

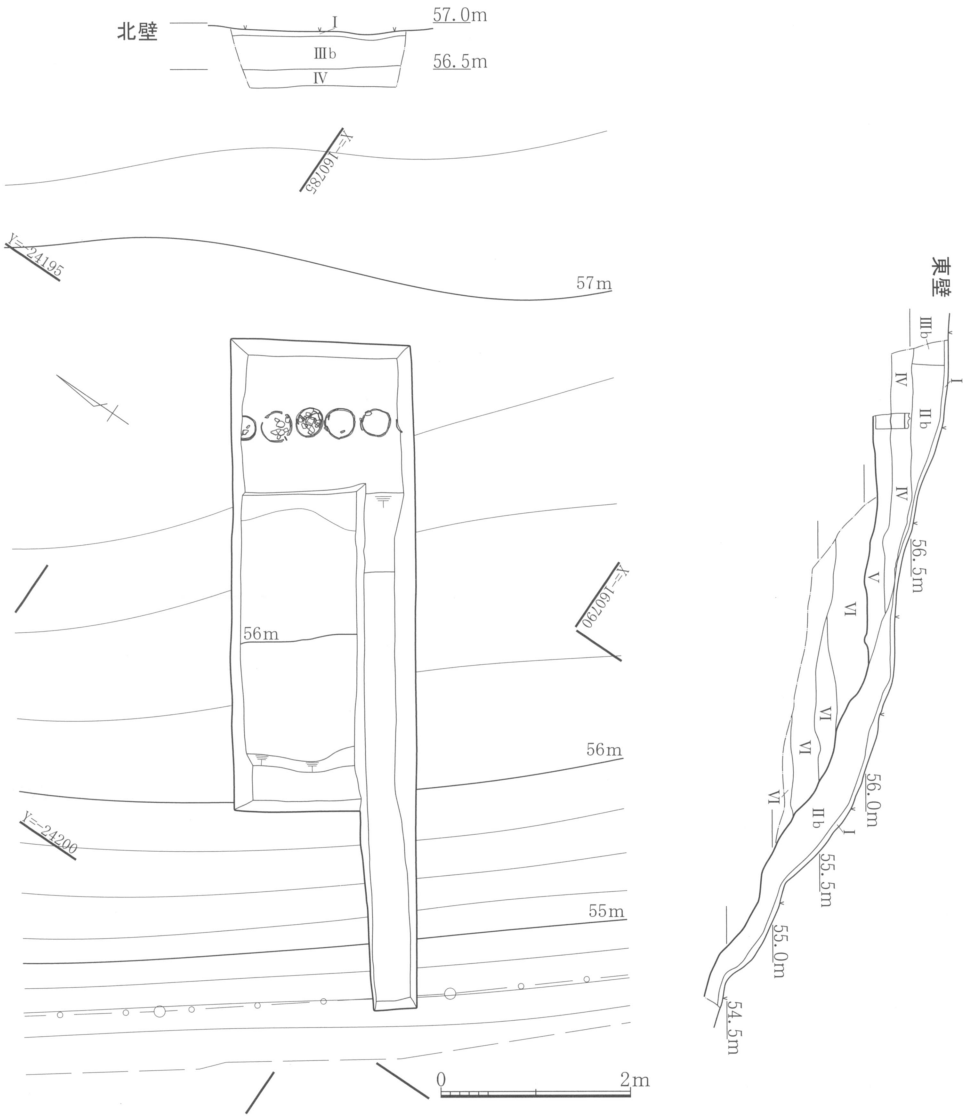
層位は、表土（Ⅰ）の下に流土（Ⅲb）が約 0.2 m～約 0.6 mの厚さで堆積している。後世の盛土（Ⅲa）が削られた後に形成された上方の盛土からの２次堆積と考えられる。この盛土（Ⅲa）は、もっとも厚い箇所で約 0.7 mを測り、トレンチ内の広い範囲で確認される。葺石やテラス面が削られた後に付近を覆ったものであろう。盛土の時期は不明である。第２段斜面の葺石が削られた箇所で墳丘盛土（Ⅴ）を確認した。シルト層である。確認範囲が狭いため確定ができないが、地山（Ⅵ）である可能性も考えられる。墳丘築造前の旧地形の中でも最高所付近にあたるため、墳丘第２段目の一部については地山成形である可能性があろう。トレンチ西端床面は激しく削られている状況が認められ、第１段斜面は完全に失われているといえる。

遺構は、標高約 55.7 mの高さで第１段テラス面を検出しているが、残存範囲は葺石基底から約２mで、それより周濠側では次第に下りの傾斜となっていく。周濠側ほど削平されている状況が窺われる。埴輪列は確認されていないことから、埴輪列はテラス面の周濠側に樹立されていたものが、削平により失われたと考えられる。また、第２段斜面の葺石を検出した。基底から長さ約３m、高さ約 0.8 mの範囲が残存しているが、上方は削られて失われている。石材は長さ 10 ～ 20 ㎝ほどの大きさを主体とするが、一部に 30 ㎝に及ぶものも認められる。平らな石を貼るように設置しているものもあるが、主体的な方法ではない。明確な基底石や目地などは認められない。残存する葺石の傾斜面は約 25 度である。

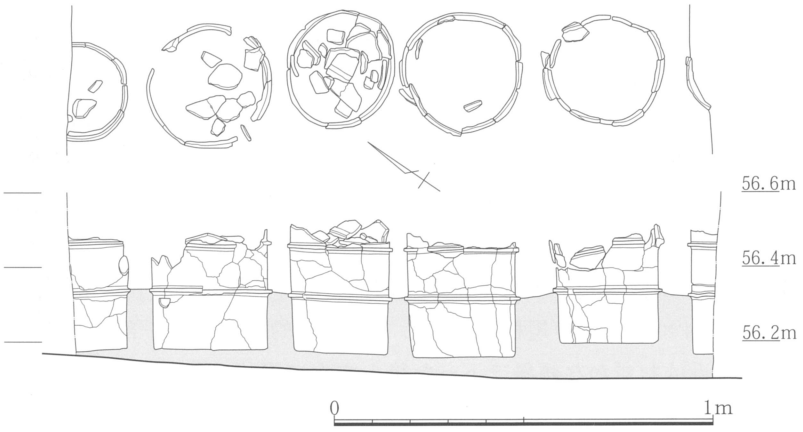
遺物は、円筒埴輪や土師器の破片のほか、陶器や瓦の破片などが出土している。

第 12 トレンチ（第 20 図、図版 25）　墳丘主軸の後円部側にあたる第 11 トレンチを北に約 35 m回り込んだ位置にあたる。長さ５m×幅２mの規模で設定して、最終的に濠側の一部を長さ１m×幅 0.6 m拡張した。トレンチ周辺の裾付近はわずかな傾斜で下った後、すぐに崖状に落ち込んでいる。調査の結果、濠側が一部削平されたテラス面を検出した。

層位は、表土（Ⅰ）の下に流土（Ⅲb）が 0.3 m程度の厚みで堆積しており、すぐに地山（Ⅵ）に至る。地山は比較的細かい単位で分かれている。地山の検出面は標高 55.5 m～ 56 m付近であるが、第 11 トレンチの墳丘第１段テラス面の高さが標高 55.5 m付近であることから、濠側が削られているものの概ねテラス



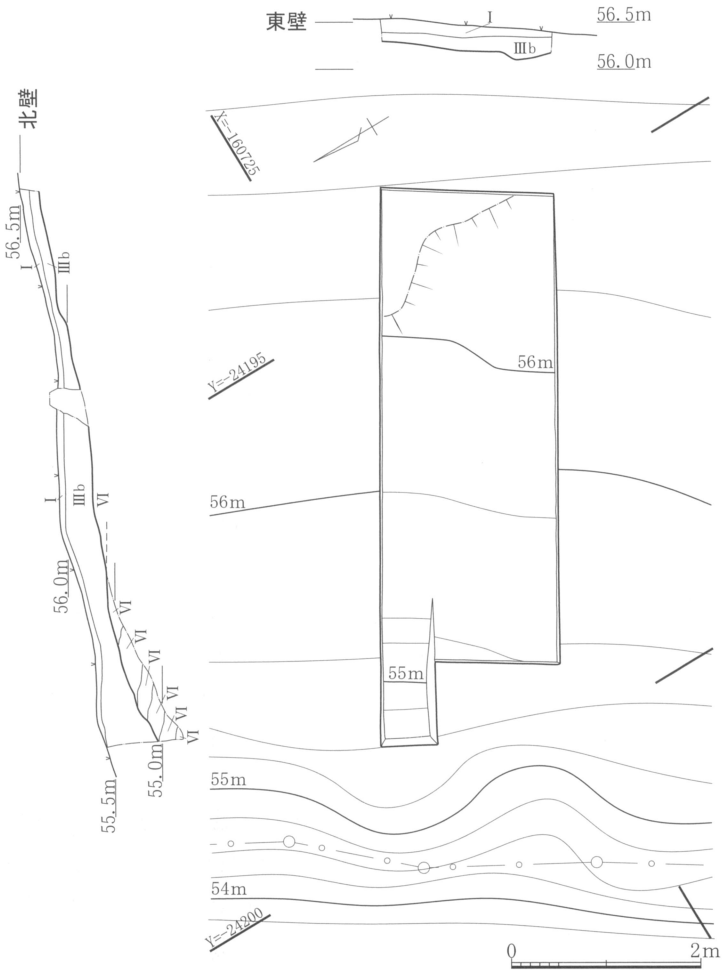
トレンチ平面・断面



埴輪列平面・断面

第18図　三吉陵墓参考地　第10トレンチ平面図・断面図（1/80、1/20）

第19図　三吉陵墓参考地　第11トレンチ平面図・断面図（1/80、1/40）



第20図　三吉陵墓参考地　第12トレンチ平面図・断面図（1/80）

面が残存していると考えてよさそうである。

遺構は、墳丘第１段テラス面を検出したが、埴輪列は検出されなかった。第11トレンチでも第２段斜面の葺石とテラス面が確認されているが、埴輪列は確認されていない。このことから、埴輪列はテラス面でも周濠寄りに樹立されていたと考えられ、既に失われている可能性が高いと考えられる。

遺物は、円筒埴輪や土師器の破片のほか、瓦や瓦器の破片が出土している。

3　出土遺物

（1）埴輪（第21～25図、図版26～29－1）

出土した埴輪の大半は、円筒埴輪や朝顔形埴輪といった円筒埴輪列を構成する個体である。円筒埴輪のほかには、壺形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪、短甲形埴輪などが確認できる。

埴輪の焼成については、ほとんどの資料に黒斑が見られることから、基本的には野焼きによるものと考えられる。焼成の仕上りは、須恵質といわれるような硬質なものは存在せず、軟質のもののみである。色調は、褐色から黄褐色となるものが多く、焼成が甘く明黄褐色から黄灰色となるものが次に多い。胎土には、基本的に直径３㎜以内の砂粒（白色粒）が１％程度含まれるものが多い。残存状況は、円筒・形象埴輪ともに概して良くない。表面が剥がれているものが多く、調整が確認出来ないものがほとんどである。透孔は、大半が円形であるが、そのほかに半円形や歪んだ半円形のものもわずかにみられる。

円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪（第21～23図１～20）　まず、比較的残存状況の良い、第５、９、10トレンチの埴輪列資料について順に述べ、その後各トレンチの破片について述べいく。

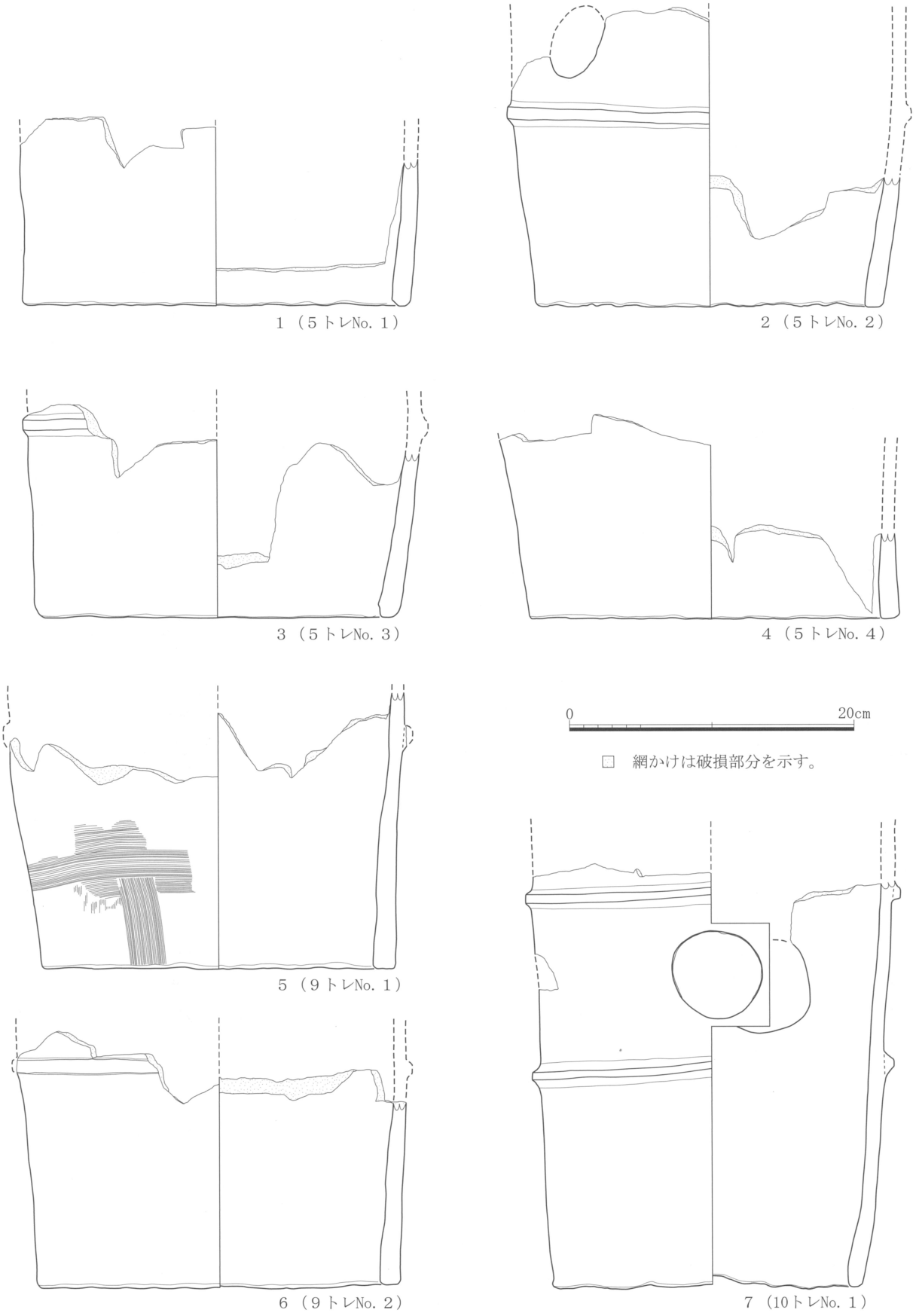
第５トレンチの埴輪列について、１は、トレンチの西から１番目の個体である。第１段目のみが残り、突帯形状および突帯間隔は不明である。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、27.4cmを測る。外面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。内面調整はナデと考えられるが、不明瞭である。２は、トレンチの西から２番目の個体である。第１段目より第２段目の一部までが残る。突帯形状は低い台形、突帯間隔は基部から第１段目突帯の上部までで約14cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、24.7cmを測る。透孔は、第２段目に半分ほどしか残っていないが、おおよそ円形である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。３は、トレンチの西から３番目の個体である。第１段目より第２段目のごく一部までが残る。突帯形状は低い台形、突帯間隔は基部から第１段目突帯の上部までで約14cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25.9cmを測る。外面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。内面調整はナデと考えられるが、不明瞭である。黒斑が見られる。４は、トレンチの西から４番目の個体である。第１段目のみが残り、突帯形状および突帯間隔は不明である。成形は接合痕跡が不

明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、26.3cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。

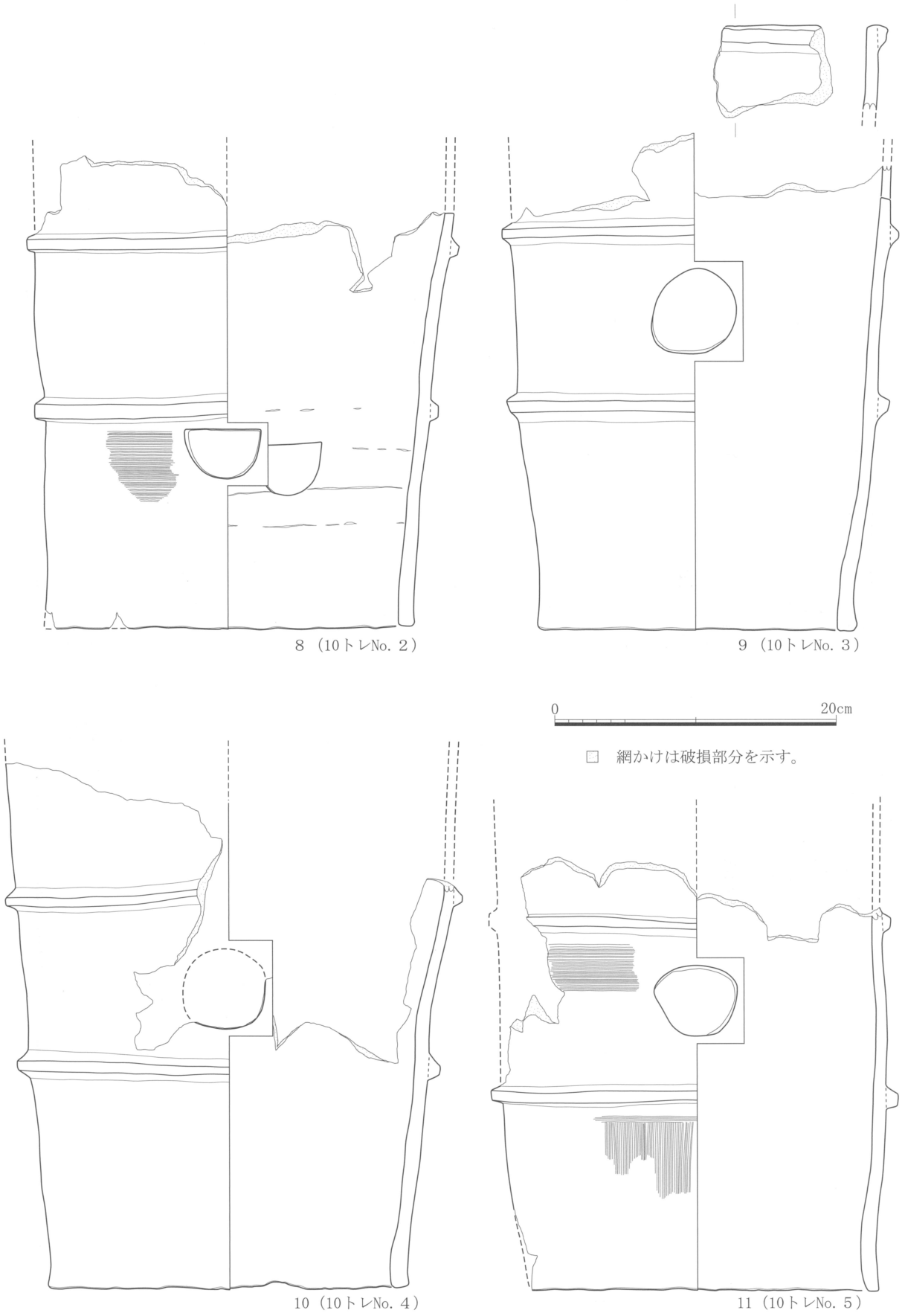
第9トレンチの埴輪列について、5は、トレンチの西から1番目の個体である。第1段目より第2段目のごく一部までが残る。突帯形状は低い台形の可能性があるが、摩滅のため、詳細は不明である。突帯間隔は基部から第1段目突帯の上部までで約17cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25cmを測る。外面調整は、部分的にタテハケの後にヨコハケを施していることが看取出来る。内面調整はナデと考えられるが、不明瞭である。6は、トレンチの西から2番目の個体である。第1段目より第2段目のごく一部までが残る。突帯形状は低い台形の可能性があるが、摩滅のため、詳細は不明である。突帯間隔は基部から第1段目突帯の上部までで約16.2cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25.7cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。

第10トレンチの埴輪列について、7は、トレンチの西から1番目の個体である。第1段目より第3段目のごく一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部までで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部までで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、22cmを測る。第2段目の透孔は、円形である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。8は、トレンチの西から2番目の個体である。第1段目より第3段目の一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部までで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部までで約11.6cmである。成形は、粘土紐による輪積みである。底部径は、26.6cmを測る。第1段目の透孔は、半円形である。外面調整はヨコハケを施していることが看取出来るが、不明瞭である。内面調整はナデと考えられ、ナデ消しが不完全なため、粘土紐の接合痕跡が部分的に残る。黒斑が見られる。9は、トレンチの西から3番目の個体である。第1段目より第3段目のごく一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部までで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部までで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、23cmを測る。第2段目の透孔は、円形である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。埴輪内部の埋土上面より、円筒埴輪の口縁部が検出されたが、その位置から考えて、9に伴う可能性が高いものとして、ここで述べておく。径復元の困難な小片であり、口縁端部は突帯状に粘土帯を貼り付けている。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。10は、トレンチの西から4番目の個体である。第1段目より第3段目の一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部までで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部までで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25.8cmを測る。透孔は、第2段目に半分ほどしか残っていないが、おおよそ円形である。外面調整は1段目にヨコハケを施していることが看取出来るが、極めて不明瞭である。内面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。11は、トレンチの西から5番目の個体である。第1段目より第3段目のごく一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部までで約14cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部までで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なものの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、26cmを測る。第2段目の透孔は、歪んだ半円形である。外面調整は、第1段目でタテハケの後にヨコハケ、第2段目でヨコハケを施していることが看取出来るが、不明瞭である。内面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。

円筒埴輪列以外の破片について、12は、第1トレンチ後世盛土より出土の円筒埴輪片である。突帯形状は低い台形、透孔は残存部分より歪んだ半円形と考えられる。13は、第9トレンチ後世盛土より出土の円筒埴輪片である。突帯形状は台形、透孔は残存部分より半円形と考えられる。14は、第5トレンチ流土より出土の円筒埴輪片である。突帯形状は台形で、外表面は刷毛状の道具により赤色塗彩されている。15、16、17は、第7トレンチ後世盛土より出土の朝顔形埴輪片である。胎土・色調・焼成より同一個体の可能性が高い。15は口縁部片で、端部は平坦である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。16



第21図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（1）　円筒埴輪（1/4）

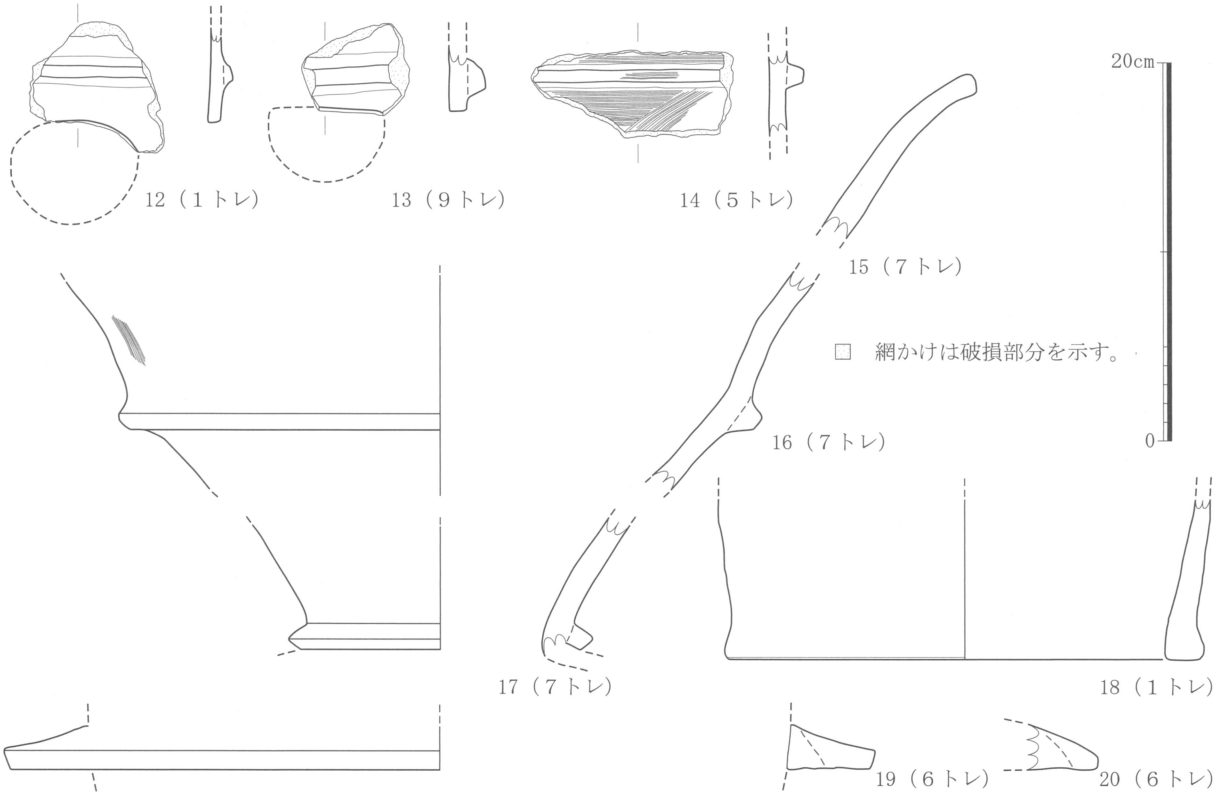


第22図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（2）　円筒埴輪（1/4）

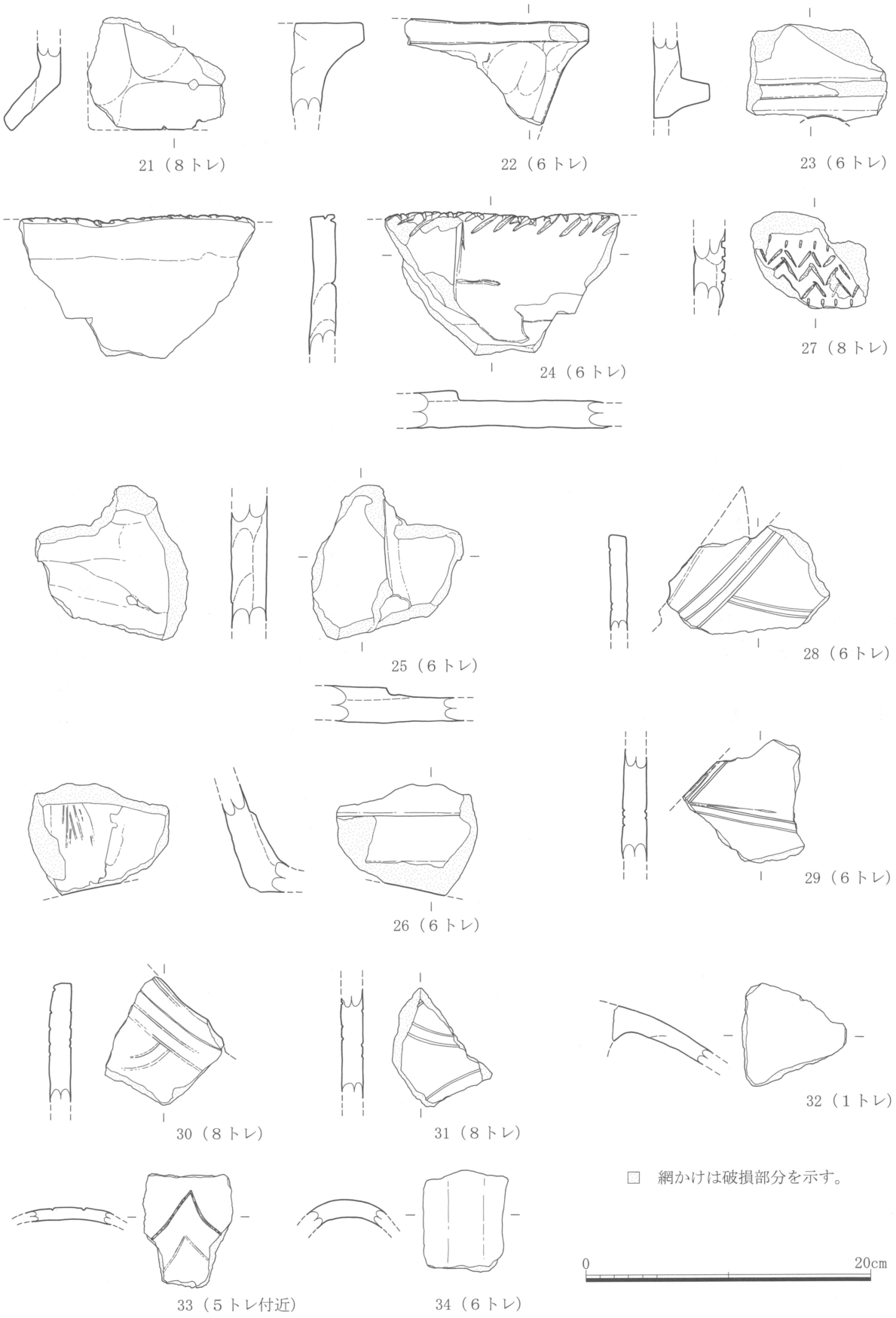
は口縁部から頸部間の破片で、外面中ほどに台形の突帯を有している。外面調整は、ヨコハケを施していることが看取出来るが、不明瞭である。内面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。17は頸部片で、頸部突帯が残る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。18は、第1トレンチ流土より出土の円筒埴輪底部片である。底部径は、復元で25.4cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。19、20は壺形埴輪として記述するが、小片のため、壺形以外の可能性もある。19は、第10トレンチの埴輪列西側、墳丘盛土直上より出土の鍔部片である。最大径は、復元で46cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。20は、第6トレンチの葺石直上より出土の鍔部片である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。（横田）

形象埴輪（第24図21～第25図41）　21～23は家形埴輪の破片である。いずれも裾廻突帯である。21は断面が「へ」の字状に屈曲しており、22・23は通有の縁側状の表現となっている。下面には補強粘土が残る。21は第8トレンチ出土、22・23は第6トレンチ出土であり、造出上に複数個体の家形埴輪が配列されていたことを示す。破片は小さいため、家の構造や形式を知ることは難しい。

24～27の4点は、短甲形埴輪の破片と考えられる。24はもっとも大形の破片である。長さ約16㎝の範囲で残る上辺部は直線を示し、ヘラ描きにより革覆輪を表現する。その他に明瞭な線刻表現は認められない。断面は湾曲が認められず平板な作りである。上辺とほぼ直交する方向に幅4㎝以上、厚み約0.5㎝の粘土帯が貼付されており、左側へ緩やかに曲がるようである。内外面とも、現状で明瞭なハケメは認められない。上記の諸特徴から推定すると、24は襟付短甲形埴輪の後胴右肩部付近の破片である可能性が考えられる。地板表現が認められないため、その型式は不明ながら、おそらくは三角板革綴襟付短甲を表現したものであろう。粘土帯は後胴のU字形帯金に該当すると考えられる[4]。25と26は、同じく粘土帯が貼付されていることから、襟付短甲形埴輪片と考えられる。25は天地の関係から、後胴左肩部に近いU字形帯金とその周辺の破片と考えられる。26は、下方が外側に広がる形態を示すことから、裾板付近を表現したものと考えられようか。25は粘土帯の幅が5.5㎝を測り、鉄製短甲に比べるとかなりの大形品であると推測される。24～26は、同じ第6トレンチの出土であり、同一個体である可能性が高い。特に、24、25は



第23図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（3）　円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪（1/4）



第24図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（4）形象埴輪（1/4）

暗茶褐色の色調が酷似している。27は、草摺部分である。第6トレンチ出土の短甲形埴輪と異なり、赤褐色を呈する。約1㎝間隔で施されたヘラ先による刺突文の間に、三重の鋸歯文が線刻されている。

28～32は、蓋形埴輪の破片である。28～31は飾板の破片である。おおむね2本1単位の線刻で台形や三角形の区画が表現されているようである。器壁の厚さは1～1.5㎝を測る。32は笠部の破片である。

33、34は器種が不明、または特定の難しいものである。33は厚さ約0.8㎝で薄手の作りである。やや外反しながら下方に広がるような形態が推測される。外面には、大きな単位で二重の鋸歯文が確認できることから、草摺を表現した破片である可能性が考えられる。34は、円筒形と考えた場合に蓋形埴輪の立飾り軸部や家形埴輪の円柱部の可能性が考えられようか。あるいは、柵形埴輪など楕円筒形の埴輪の一部である可能性もあり得る。

35～41は、第7トレンチの埴輪埋設遺構の構築に使用された埴輪片である。多くは蓋形埴輪片であるため、記述の順番が前後し一部に異なる器種を含むものの、便宜上形象埴輪と一括で記述することとする。

35～37は、後述する埋設遺構への埴輪設置の第2段階で使用された蓋形埴輪飾板の破片である。破片の数は多いものの、接合関係にあるものは思いのほか少ないようである。その理由としては、埴輪埋設遺構の上方で出土した朝顔形(壺形)埴輪を中心とする破片の中に、埋設遺構内の蓋形埴輪とは別個体の軸部上端の破片が認められている。遺構の構築にあたっては、複数の蓋形埴輪を用いていた可能性が高いと考えられることによる。よって、蓋形埴輪の全体像を図化することは現状では難しい。飾板は通有の形態と考えられ、縁に幾つかの鰭飾りを配置している。線刻は28～31と同様に、基本的には2本1単位として描かれ、三角形や台形の区画ができる。一部に、36のような曲線表現を伴う場合もある。飾板の厚さは1㎝前後で、色調は赤褐色～黄褐色を呈する。38は飾板を接合するために軸部上端に付く受部の破片である。現状は摩滅のため明確な接合関係を示さないが、同一個体の可能性が高いと考えられる。39は軸部で、横倒しの状態で出土したものである。高さは約18.5㎝、底部径は約8.5㎝を測る。中位の対向する位置に、2つのやや楕円形を呈する透孔が穿たれている。40は、軸部の下方、第1段階と第2段階の中間付近で検出された破片である。赤褐色を呈する。器壁の厚みは約1㎝で、上方に広がる形態を示すと考えられる。円形透孔の一部が残存している。外面には非常に細かいタテハケが認められる。形態上の特徴から蓋形埴輪の台部の可能性が考えられよう。

なお、これら蓋形埴輪の破片の中に、明確に笠部と判断できる破片は認められていない。

41は、第1段階で設置された復元底径約41㎝の埴輪底部である。残存高約9㎝を測る。色調は赤褐色を呈する。摩滅が著しいが、外面はタテハケの後ヨコハケが施され、不明瞭ながら静止痕も認められるようである。ハケメは40のものとは異なる。内面は指ナデである。第2段階の上方で多数検出されている朝顔形(壺形)埴輪の破片も赤褐色を呈しており、同一個体である可能性も考えられよう。

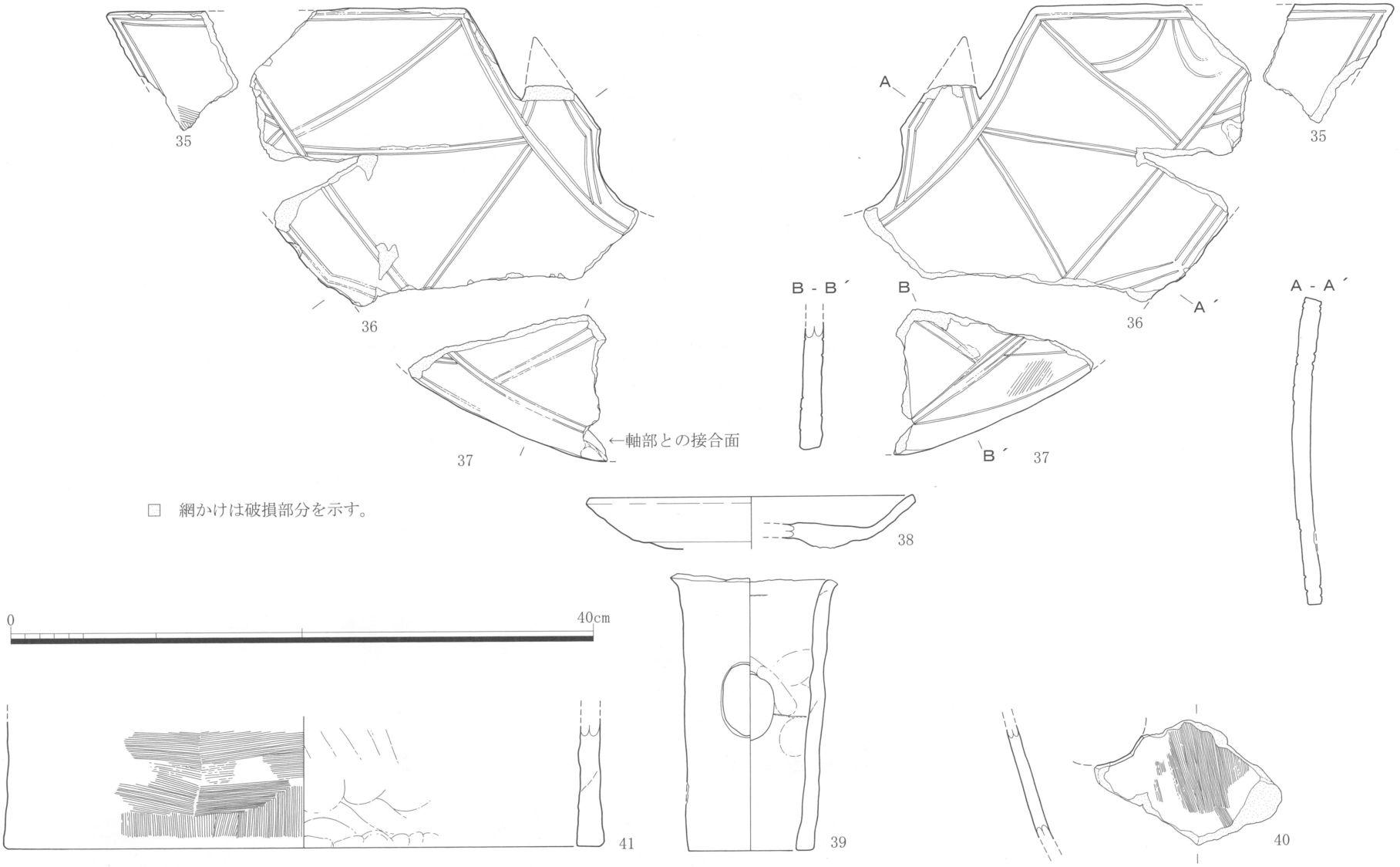
形象埴輪は、いずれの破片も胎土に大きな違いは認められない。色調は茶褐色～黄褐色を呈するものが多いが、一部に赤褐色を呈するものが含まれている。全体に摩滅の顕著な破片が多く、明瞭な調整痕の認められないものが多い。

（2）土器（第26図）

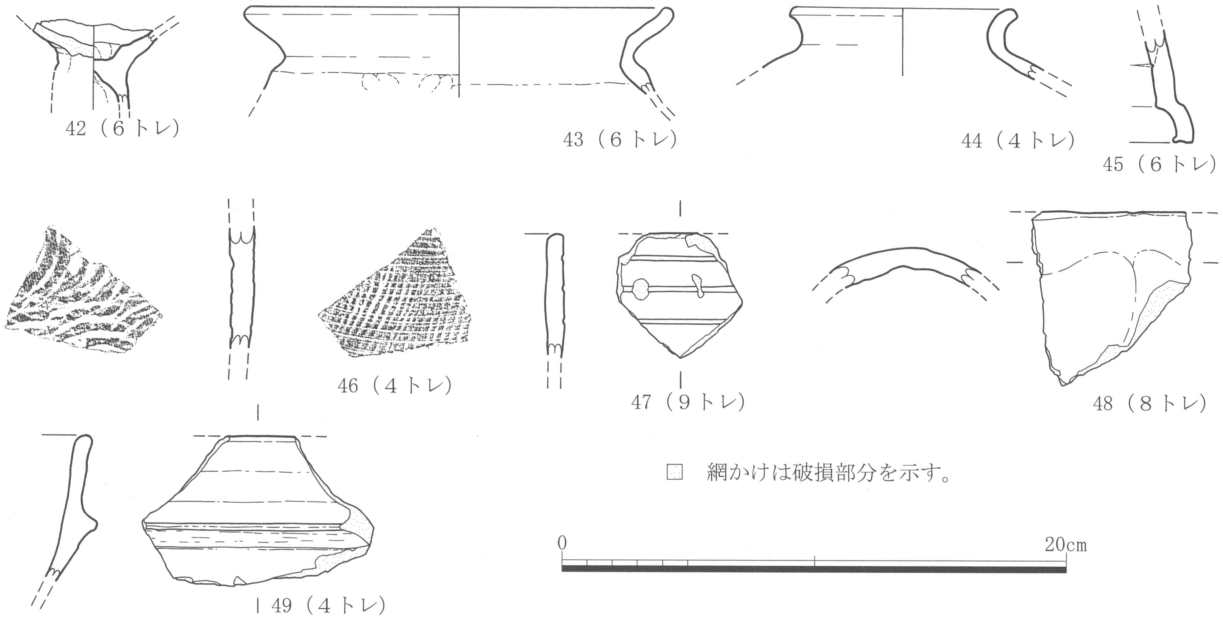
土師器（第26図42、43）　土師器の破片である。42は高杯で、第6トレンチのⅡa層から出土した。口縁と脚の端部をともに失っている。残存高は約3.5㎝である。一部摩滅しているが丁寧な指ナデが確認できる。杯部内面の中心付近が直径約2㎝、深さ約0.7㎝の範囲でくぼんでいる。色調は黄褐色を呈する。

43は甕で、第6トレンチの前方部と造出との屈曲部付近のⅣ層から出土した。復元口径約22㎝を測るが、残存高は口縁部から約3.5㎝で、肩部以下は失われている状態である。口縁部は肩部からいったんすぼまり、外側に屈曲したのち、直線的に立ち上がる。口縁部内部は肥厚する。口縁部の厚みは約0.7㎝であるが、胴部付近は約0.3㎝と薄くなる。内外面とも指ナデで、ハケメやケズリ痕などは認められない。色調は淡赤褐色～黄褐色を呈する。

甕については、出土層位からも本参考地築造に伴う可能性が高いと考えられよう。

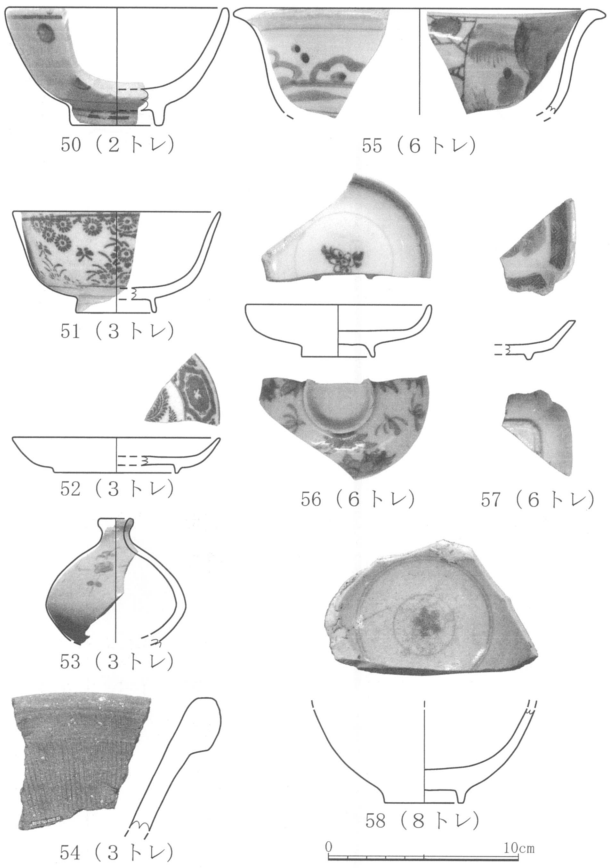


第25図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（５）　形象埴輪ほか〔第７トレンチ埴輪埋設遺構内〕（1/4）



第26図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（6）　土器、その他（1/3）

須恵器（第26図44～46）　須恵器の破片である。44は短頸壺の口縁部である。口縁端部は丸く仕上げられ、外面には自然釉が付着する。復元口径は12㎝を測る。45は脚付壺の脚端部と考えられる。灰白色を呈し、回転指ナデ痕が明瞭に残る。46は、甕の胴部である。外面には平行叩き痕があり、叩きののち、カキメ状の浅い沈線が廻っている。内面には同心円文当具痕が残る。（清喜）



第27図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（7）　陶磁器（1/4）

（3）陶磁器（第27図、図版29）

表土と後世盛土より出土した遺物について、トレンチ順に述べる。50は、第2トレンチ後世盛土より出土の磁器碗片である。素地内外面に鉄釉による染付を施す。51から54は、第3トレンチ近代盛土より出土の陶磁器片である。51は磁器碗で、素地内外面にコバルト釉による染付を施す。52は磁器皿で、素地内面に呉須による染付、口縁端部に褐釉を施す。53は磁器壺で、素地外面に呉須による染付を施す。内面にロクロナデの跡が残る。54は陶器擂鉢で、口縁端部が肥厚している。擂り目は密である。55は第6トレンチ後世盛土より出土の磁器碗で、口縁部が外反している。素地内外面に呉須による染付を施す。56と57は、第6トレンチ表土より出土の磁器皿である。56は、素地内外面に呉須による染付を施す。57は輪花角皿で、素地内面に陽刻と呉須による染付を施す。58は、第8トレンチ後世盛土より出土の磁器碗で、外青磁である。素地内面には、呉須による染付と見込中央にコンニャク印判による五弁花文を施す。（横田）

（4）その他の遺物（第 26 図）

ここでは、資料数の僅少なものをまとめた。近世遺物を除く、古墳時代以外の遺物と考えられるものである。47 は土器片で、口縁部に沿って浅い凹線が 3 本走る。黒褐色～暗茶褐色を呈し、内外面に横方向へのミガキ痕が認められる。縄文土器であろうか。48 は瓦器で、円筒形の形状を呈するものと考えられる。内外面に指ナデと指オサエが認められる。49 は土師器の羽釜である。黄褐色を呈し緻密な胎土である。

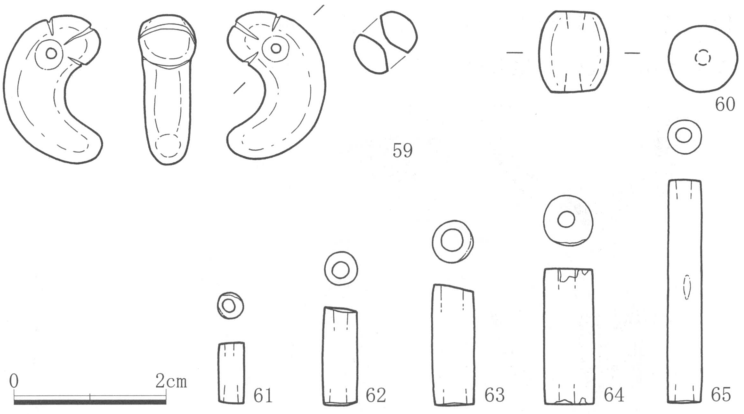
（5）玉類（第 28 図、図版 4）

今回の調査で出土したものではなく、本参考地から明治 15 年に出土して、明治 17 年以降当部で所蔵する玉類であり、すべて石製である。この点数が、本参考地に本来副葬されていた玉類のすべてであるか否かは不明である。

勾玉（第 28 図 59）　硬玉製である。長さ 1.9 ㎝、穿孔部での幅 0.75 ㎝、頭部の厚み 0.7 ㎝を測る。頭部は丁字頭となり明瞭に厚みを増す。孔径は大きく、両面とも 0.35 ～ 0.4 ㎝を測る。両面穿孔であり、中央部の径は 0.15 ㎝となる。尾部に向かって次第に細くなり、全体に端正な形態を示す。石材は透明度の高い濃緑色を基調とするが、広い範囲に灰緑色に近い白斑部が広がる。非常に丁寧に研磨されている。

棗玉（第 28 図 60）　硬玉製である。長さ 1.05 ㎝、最大径 0.85 ㎝を測る。形態は、中央付近が最大径となる樽形を呈する。孔径は 0.25 ㎝で両面穿孔と考えられる。線刻は施されていない。濃緑色を基調とするが、灰緑色に近い白斑部が全面に見られるため、やや曇った色調を呈する。非常に丁寧に研磨されている。

管玉（第 28 図 61 ～ 65）　碧玉製である。61 は長さ 0.8 ㎝、直径 0.35 ㎝、62 は長さ 1.25 ㎝、直径 0.45 ㎝、63 は長さ 1.6 ㎝、直径 0.5 ㎝を測る。孔径は 61、62 が 0.2 ㎝、63 は 0.28 ㎝を測る。いずれも両面穿孔と考えられる。61 ～ 63 とも色調は青緑色を呈し、非常に丁寧に研磨されている。64、65 は、端面や孔内に赤色顔料がわずかに付着している。64 は長さ 1.75 ㎝、直径 0.6 ㎝、65 は長さ 2.95 ㎝、直径 0.45 ㎝を測る。孔径は 64 が 0.23 ㎝、65 は 0.22 ㎝を測る。いずれも両面穿孔と考えられる。64、65 とも色調は灰緑色を呈し、丁寧に研磨されている。また、端面や孔内に赤色顔料がわずかに付着している。（清喜）



第28図　三吉陵墓参考地　出土品実測図（8）　玉類（1/4）

4　調査の所見

（1）墳丘の規模と構造

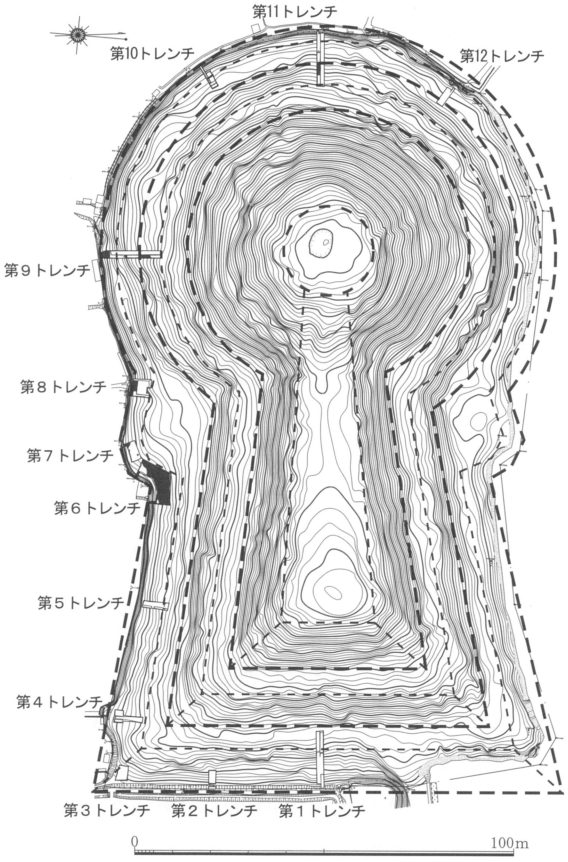
新規に作成した墳丘測量図（第 6 図）と本調査で得た所見を元に、平成 22 年度に広陵町教育委員会が三吉陵墓参考地の隣接地で実施した調査成果も参考にして（第 30 図）、墳丘の規模と構造について述べ、墳丘本来の規模復元を試みる（第 29 図）。

墳丘主軸長　墳丘の主軸長について、主軸上に設定した第 1 トレンチと第 11 トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、正確な数値は不明である。前方部主軸上に設定した第 1 トレンチの東端には葺石の基底石等が残らず、地山が緩やかに傾斜しているのみであった。また、後円部主軸上に設定した第 11 トレンチの西端にも葺石の基底石等が残らず、現代の撹乱によって地山まで削られていた。広陵町教育委員会が設定した第 1 調査区は、宮内庁が設定した第 11 トレンチの延長線上の調査区であるが、ここでも葺石の基底石等が残っていなかったため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の主軸長は、約 200 m である。

後円部最大幅　墳丘主軸と直交する箇所に設定した第９トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、後円部最大幅の正確な数値は不明である。第９トレンチの南端では、斜面と葺石が比較的良好に残存しており、トレンチ外まで続いていた。広陵町教育委員会が設定した第３調査区は、宮内庁が設定した第９トレンチの延長線上の調査区であるが、ここでは葺石の基底石等が残っていなかったため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の後円部最大幅は約 117 mである。しかし、後円部の半径にあたる第９トレンチで葺石が残っている部分と墳丘主軸までの距離は約 60 mであることから、本来の後円部最大幅は 120 mを超えるものと推測出来る。そのように考えた場合、後円部の北側墳裾については、陵墓域外の現貯水池内に位置する可能性がある。

前方部最大幅　現状の前方部南東隅に設定した第３トレンチ、前方部南側東寄りに設定した第４トレンチ、前方部南側中央に設定した第５トレンチ、前方部と造出しの接点付近に設定した第６トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、前方部最大幅の正確な数値は不明である。第４トレンチの南端では、葺石が少量残存しており、トレンチ外まで続いていると予測出来たが、陵墓域外のため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の前方部最大幅は、約 116 mである。しかし、前方部南側東端の現況は、崖状に削れており、本来の前方部最大幅は 120 mを超えるものと推測出来る。そのように考えた場合、前方部の北側墳裾については、後円部の北側墳裾と同様、陵墓域外の現貯水池内に位置する可能性がある。

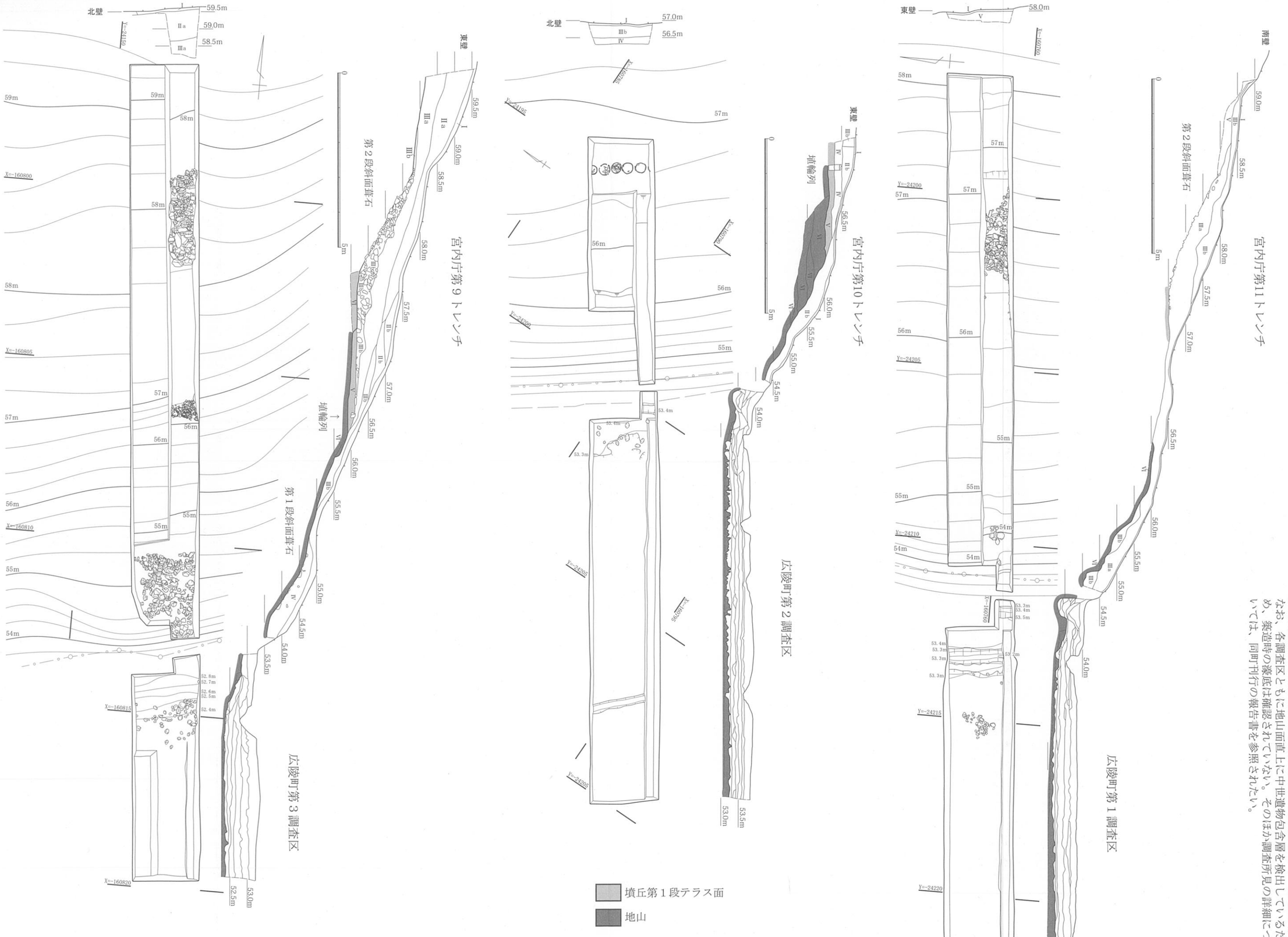
造出部最大幅　現状の南側造出部南東隅に設定した第６トレンチ、南側造出部南側に設定した第７トレンチ、南側造出部南西隅に設定した第８トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、造出部の正確な規模は不明である。第６、７、８トレンチの南端では、葺石が良好に残存しており、トレンチ外まで続いていると予測出来たが、陵墓域外のため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の造出部最大幅は、約 104 mである。しかし、墳丘主軸から現状の南側造出部の南側墳裾までは 54 mあることから、本来の造出部最大幅は 108 mを超えるものと推測出来る。そのように考えた場合、造出部の北側墳裾については、後円部・前方部の北側墳裾と同様、陵墓域外の現貯水池内に位置する可能性がある。



第29図　三吉陵墓参考地　墳丘推定復元図（1/2,000）

段築　墳丘の段築について、調査では第９トレンチと第 11 トレンチで第２段目斜面までしか確認していないが、比較的整った北側の現状をみる限り、明らかに３段築成である。

第１段目　第１段目の裾については、詳細は明らかでないものの、広陵町教育委員会の第３調査区で、葺石の転落石らしき石が出ている標高約 52.5 mから、宮内庁の第９トレンチで葺石が残る最下部の標高約 53.5 mより下までの間に第１段目南裾があったと考えられる。第１段目テラスは標高約 56.2 mに位置し、長さは残存テラスと残存斜面を直線で交差させた復元長で約 6.2 mである。第１段目の高さについては、広陵町教育委員会第３調査区での標高約 52.2 mを墳裾と仮定した場合、宮内庁の第９トレンチで検出した標高約 56.2 mの第１段目テラスから考えて、約４mと推測出来る。上記より、第１段目の規模は、主軸長約 200 m、後円部最大幅約 120 m、前方部最大幅約 120 m、高さ約４m、テラス幅約 6.2 mと推定復元が可能である。



第30図　三吉陵墓参考地　宮内庁及び広陵町調査区平面図・断面図（1/100）

第２段目　第２段目の裾については、第９トレンチで検出した第１段目テラスの高さから標高約 56.2 m である。第２段目の残存斜面は、標高約 57.75 mまでであるが、墳丘測量図を見る限り、標高約 60 mより 61 mまでに明瞭な平坦面が見られ、これを参考にした場合、第２段目の高さについては、約４mと推測出来る。第２段目テラスについて、標高約 60 mより 61 mに位置していると仮定した場合、その長さは墳丘測量図を見る限り６m程度である。上記より、第２段目の規模は、主軸長約 175 m、後円部最大幅約 98 m、前方部最大幅約 84 m、高さ約４m、テラス幅約６mと推定復元が可能である。

第３段目　第３段目の裾については、墳丘測量図で標高約 61 mより等高線が明らかに密となることから、その付近が裾と考えられる。しかし、前方部第３段目東端を見ると、ここだけ標高約 62 mより等高線が密となる。現状の後円部第３段目墳頂は標高約 72 m、前方部第３段目墳頂は標高約 68.5 mであり、平坦面の幅は、後円部・前方部ともに約 24 mである。標高約 61 mを第３段目墳裾と仮定した場合、第３段目の高さは、後円部で約 11 m、前方部で約 7.5 mである。上記より、第３段目の規模は、主軸長約 150 m、後円部最大幅約 74 m、前方部最大幅約 51 m、後円部高約 11 m、前方部高約 7.5 m、後円部平坦面幅約 24 m、前方部平坦面幅約 24 mと推定復元が可能である。

（２）埴輪列の位置について

本調査で得た所見と墳丘復元図（第 29 図）を元に、埴輪列の位置について述べ、本来の位置復元を試みる。なお、本調査で検出したのは、第１段目テラス上の埴輪列のみであり、第２、３段目の状況については不明である。

第５トレンチ　前方部南側の円筒埴輪列である。埴輪列は、基底部が現状で標高約 55 mに位置する。埴輪は全部で４個体である。埴輪列全体が南側へ大きく傾いていること、各個体が直線で並ばないことから、それぞれが本来の位置にないことは明らかである。ゆえに、本トレンチで検出した埴輪列は、築造当初の位置にはなく、移動して現在の位置となったものである。埴輪列本来の位置は、南への著しい傾斜から見て、現在位置より北と考えられるが、詳細は不明である。

第９トレンチ　後円部南側の円筒埴輪列である。埴輪列は、基底部が現状で標高約 56 mに位置する。埴輪は全部で４個体である。埴輪列全体が南側へ傾いていること、崩れた墳丘盛土内にも埴輪片が含まれることから、それぞれが本来の位置にないことは明らかである。ゆえに、本トレンチで検出した埴輪列は、第５トレンチと同様、築造当初の位置にはなく、多少なりとも移動して現在の位置となったものである。埴輪列本来の位置は、南への傾斜から見て、現在位置よりやや北と考えられるが、第１段目テラスがほぼ水平に残存する状況からは、それほど埴輪列は大きく動いてはいないと判断できる。その場合、第１段目テラスは、残存テラスと残存斜面を直線で交差させた復元長で約 6.2 mであることから、埴輪列はテラス南端より約 2.2 m北側に位置していると推測出来る。

第 10 トレンチ　後円部南西側の円筒埴輪列である。埴輪列は、基底部が現状で標高約 56.2 mに位置する。埴輪は全部で６個体である。埴輪が全体的に直立していること、直線的に並ぶことから、樹立当初の位置にあることは明らかである。第５トレンチ、第９トレンチの埴輪列は、本来の位置を保っていないため、樹立当初の位置を保っているのは、第 10 トレンチの埴輪列のみである。埴輪列の位置については、墳丘復元図を見た場合、第１段目テラス南端より約２m北側となっており、第９トレンチで推定した埴輪列の位置と矛盾しない。

後円部と前方部の埴輪列　後円部の埴輪列については、第９、10 トレンチで、その墳丘における位置を推定することが出来たが、前方部の埴輪列については、上述の通り、本来の位置を保つものが無く、推定することが出来なかった。第 10 トレンチの埴輪列の基底部高は標高約 56.2 m、第９トレンチの埴輪列の基底部高は標高約 56 m、第５トレンチの埴輪列の基底部高は標高約 55 mで、トレンチの西から東へと基底部高が低くなっているが、第５トレンチの埴輪列は、その著しい傾きから、明らかに北側から下がってきたものである。墳丘を復元した場合、第１段目テラスについては後円部と前方部で大きな比高差が無いことから、第５トレンチの埴輪列は、本来１m程度北側上方に位置していたものと推測出来る。（横田）

（3）葺石について

本調査において、第４・６・７・８・９・11トレンチにおいて葺石を検出している。第４・６・７・８トレンチは第１段斜面の葺石であり、第11トレンチでは第２段斜面の葺石を検出した。第９トレンチのみ第１、２段両方の斜面で検出している。

第４トレンチ　ごく一部の確認に留まっているため詳細は不明である。突出部として南にのびる土堤の下に潜り込んでいくため、前方部南側面の裾が残存していることが期待される。石材は比較的小形のものが認められる。

第６トレンチ　もっとも広く葺石を検出した。前方部第１段斜面と造出東斜面の屈曲部である。どちらの斜面の葺石が先に施工されたか、その差は見出し難いが、一部造出側の石が前方部側の下に潜るように見える。屈曲部すべてでその状況が明瞭に見えないため明言はできない。また、屈曲部がやや不明瞭であり、目地が認められないことが特徴として挙げられる。なお、目地は第６トレンチの中で幾つか確認することができるが、６～７個が連続して積まれている状況がもっとも長いもので、多くは４～５個程度で途切れてしまう。他のトレンチでも検出範囲内で長い目地は認められない。

ところで、第６トレンチの葺石を観察した奥田尚氏からは、幾つかの所見をいただいている。

まず、石材の使用傾向により、第６トレンチの中で３つのまとまりに区別できるということである。ここでは便宜的に西区画、中区画、東区画とする（第13図矢印部分）。石材の使用傾向を見ると、比較的中区画に多様な石材が集中して用いられている一方で、西区画と東区画では、柘榴石安山岩と輝石安山岩Ａが大半を占め、他の石種はごく僅かしか使用されていない。また、西区画と中区画の境は、調査時に屈曲部であろうと認識した箇所と約0.4ｍほど西にずれている。屈曲部が必ずしも葺石の区画の境界となる必要はないが、先述したとおり屈曲部は必ずしも明瞭ではなく、目地が認められないことから、このような状況と関係するのかもしれない。

なお、この所見とは別に、石材の使用傾向を認識しない段階で、報告者において葺石の観察を行った結果を、奥田氏の所見と照合すると、西区画と中区画の境がおおむね対応するするようである（第13図中の網かけの目地）。報告者の観察は、石材の大きさや形態と積み方から違いを認識したものである。西区画においては、比較的厚みの少ない細長い石の長軸を水平方向に向けて積まれている石が目立ち、中区画においては、比較的小さく丸みのある石が多用されている状況が認められた。これは、石種だけではなく、石の形態や大きさなどが選択されていた可能性などを示唆するものであろうか。

また、中区画においては、深成岩である細粒黒雲母花崗岩、アプライト質黒雲母花崗岩や細粒閃緑岩などが、数個単位でまとまり、まだら状に点在する傾向があるという。一人が一回あたりに運搬する個数を示す可能性があるということで、葺石施工のあり方の一端を示しているかもしれない。また、巣山古墳の墳丘西側でも同様の様相が観察されているとのことであり、墳丘形態の類似する両者で葺石においても同様の傾向が認められることは、興味深い事象といえよう。

第７トレンチ　造出南斜面を検出した。後世の開墾の影響などで必ずしも残存状態が良好とはいえないが、石材の長軸を水平方向に揃えて設置するなど、施工状況をある程度把握することができる。明瞭な目地は認められない。

第８トレンチ　南側くびれ部にあたる。裾付近が良好に残存しているが、上方では既に削られている。石材の重なり具合を見る限り、残存部の下位は造出側斜面の葺石が先に施工された状況が認められるが、上位では後円部側となっている。どちらかの斜面だけが先に造られたということではないようである。くびれ部の最奥部の葺石であるが、後円部と造出の屈曲部を明瞭に示すような目地は認められない。裾では基底石と呼ぶにふさわしい大形の石が使用されている。また、大形の石の間は小形の石が充填されているような状況も認められる。

第９トレンチ　第１段斜面と第２段斜面の葺石を検出した。第１段斜面の天端は、既に削られたり流出に

より失われている。裾は境界の外に伸びていくと考えられる。検出範囲内では大形の石は少なく、石の流失も目立つが、石が11個積まれた目地が認められる箇所もあり、ある程度本来の状態を残している。第2段斜面は、上方が削平されているものの、残存部分は非常に良好に残存している。石の噛み合わせは丁寧で、密に積まれている。基底から5～6段分で、長軸が30～40㎝を測る大形の石が使用されており、基底石は長軸を水平方向に向けて設置されている。上に向かうにつれて、小ぶりな石の割合が高まり、10個程度が直線的に積まれて目地と認識できる箇所もある。本トレンチで確認される目地は、第6トレンチで認められた目地と比較してわずかばかり長い。

第11トレンチ　第2段斜面の葺石を検出した。基底部分が残存しているが、上方は第9トレンチと同じ状況で既に削られている。石材はやや小ぶりで、基底部においても長軸が30㎝を超えるような石は使われていない。比較的良好に残存しているといえるが、他のトレンチで見られたような、丁寧な積み方と比較するとやや疎らになっていることから、全体に動いているようにもみえる。石の長軸を水平方向に重ねて積んだ箇所も認められるが、目地といえるようなものではない。

各トレンチの葺石の状況を述べてきたが、葺石の施工方法としては、共通点を以下のとおり挙げることができる。

・大形の石を使用する割合が低いようである。第8トレンチの墳丘裾付近と第9トレンチの墳丘第2段斜面基底付近では、他のトレンチでは見られないような大形の石の使用が認められる。

・石の長軸を水平方向に向けて設置する場合が多い。小形の石については、斜面に長軸を突き込むようにして設置する状況が目立つ。必ずしも長軸を斜面に向けない場合も、石の噛み合わせを考えて、丁寧に施工している状況が認められる。

・施工範囲を区画するような長い目地が認められない。

以上のとおり、検出した範囲内では、葺石の施工における技術的な面では大きく異なるものではないと言えそうである。一方、第6トレンチでは石材の使用傾向が3つに分けられる可能性が指摘されているが、これらが目地と対応するわけではない。この石材の使用傾向により認識できる3つのまとまりが示す意味は、色々な可能性が考えられる。目地のような明瞭な区画をもたないものの、作業範囲を区別していた結果を示す可能性も考えられるし、単に一連の作業工程上の休止面を示すのかもしれない。いずれにしても、これらを明らかにするには事例の蓄積が必要であろう。

なお、使用されている石種やその特徴などについては、後掲する奥田尚氏の報文を参照されたい。

（4）第7トレンチの埴輪埋設遺構について

第7トレンチでは、蓋形埴輪を主体として意図的に埴輪片を埋設したと考えられる特殊な遺構を検出している。その性格については不明といわざるを得ないが、造出上面に設定されたものであり、平面上の位置から造出コーナー部分かそこに極めて近い位置にあたると考えられる。埴輪列自体は本トレンチ内では検出されていないため、埴輪列との位置関係は不明である。以下に、調査経過を辿りながら詳述していきたい。

まず、トレンチ全体を掘り下げる過程で、埴輪列が検出される可能性を考えた。しかし、攪乱を受けているためか、きれいな平坦面として検出されず、平坦面に近い高さで埴輪片が散乱する範囲が認められた。破片は朝顔形もしくは鍔付壺形埴輪（以下、単に壺形）の口縁部破片が多かったが、上層の流土内に含まれていると考えて、これを取り上げた。結果的に、この破片が出土した範囲と極めて近い位置から本遺構が検出され、かつその破片は同一個体である可能性が考えられる（第23図15～17など）。そのため、本来は大きな口縁部の破片であったことが推測されると同時に、本遺構に伴うものであった可能性が高いと考えられる。

朝顔形埴輪片を取り上げた後に周辺を精査したところ、標高約54.2ｍ付近から蓋形埴輪の立飾りのうち飾板（以下、単に飾板）が立位の状態で検出され始めた。そのため、周囲の残った流土を除去したところ、やや下がった位置に横倒しの状態で蓋形埴輪の立飾りのうち軸部（第25図39　以下、単に軸部）が検出された。後世の攪乱はそれなりに深かったようで、この時点で多くの埴輪片が露出することとなった。器面の

荒れた破片が多く、上面を削平されたことにより一定期間地表面に露出していた可能性も考えられる。そして周辺精査の結果、埴輪を中心に南北約 0.5 m×東西約 0.6 mの範囲で土の質と色調の違い(①茶褐色砂質土、②淡赤褐色粘質土で灰褐色～赤褐色粘土ブロックが顕著)を認識したことから、土坑内に埴輪が納められた遺構であると考えた。飾板は西寄りに集中し、大きな2枚の破片が立てかけられた状態で出土し、小さな破片が軸部との間に多数検出された。その中に少量の朝顔形(壺形)の口縁部破片が含まれている。

なお、壁に立てかけられている飾板の破片は全周していない。先に述べた朝顔形(壺形)の口縁部片が同じような用途で、立てかけられていたのかもしれない。遺構のすぐ東～南側では段がつくように削り込まれており、この攪乱によって朝顔形埴輪は移動・破壊されたと考えることができる。

飾板と軸部の下端はいずれも標高 53.9 ～ 53.95 m付近で揃っており、この高さが埴輪の設置面と判断された。そして、それらを取り上げた後、床面の検出を試みた。しかし、平面的には周囲と埋土は色調や土質の違いとしてある程度認識できるものの、明瞭な壁や床は認められなかった。そのため、下方を掘り下げたところ、標高 53.9 m付近で新たに埴輪片(第 25 図 40)が検出されたため、さらに掘り下げを進めた。その結果、最終的に高さ 8 ㎝ほどで半周分程度しか残っていない円筒埴輪と考えられる底部(第 25 図 41)が検出された。底部の検出面は平坦で標高 53.75 mである。結局、掘方を設けたと考えられるような、明瞭な壁は認められず、壁と考えられる立ち上がりの面では①と②・③(赤褐色～淡赤褐色粘質土で灰褐色粘土ブロック含む)がまだらに認められる状況であった。

埴輪の設置状況を確認するために、最終的に埴輪底部周辺で断面を確認した。その結果、平面での認識と同様に、埴輪を埋めた土(①)と周辺の墳丘盛土(②・③)では異なる土が使用されていることが判明した。埴輪の接地面においては、一部①と③は混在するような状況にあった。断面では埴輪の検出された範囲と重なる位置で①の立ち上がりも認められたが、袋状を呈しており、図上では線を引いてあるが、実際は①と②・③の境となるラインは不明瞭なものであった。

上記のとおり、上面ではある程度の輪郭が確認されたものの、全体として明瞭な壁や床面が形成されていないことから、掘方が設定されていた可能性は低いと考えられる。よって、周囲の盛土により見かけの掘方を形成しつつ、埴輪の設置が段階を踏みながら並行して行われたと推測される。そして、その際に埴輪の埋土と周囲の盛土は異なっていたと考えられる。

このことを踏まえて、埋設の過程を復元すると以下のようになろう。

【1】標高 53.75 m付近を最初の設置面として、まず破壊されたような埴輪底部が置かれる。埴輪底部の内側には墳丘盛土(③)が少し入っている。この時、①は接地面直上から確認でき、かつ埴輪外側に認められなかったので、先に③を土坑状になるように平面円形に積み、その見かけの掘方に接するように埴輪底部を設置したと考えられる。さらに、この段階で③は、飾板、軸部の接地面となる標高 53.9 ～ 53.95 m付近まで、約 20 ㎝ほどの厚さで盛られていたと考えられる。これは最終的な断面の確認でも土層の違いとして認識できた。そして、幾つか埴輪片を含みつつ①により内部が埋められる。→〔**段階 1**〕

【2】段階 1 を終えた時には、いったん標高 53.9 ～ 53.95 mで床面を整え、次の埴輪設置面を形成したと考えられる。そして、再度周囲に②を標高 54.2 m付近まで積み、再び見かけの掘方を作ったと考えられる。続いて平坦面上に軸部を横倒しに設置し、さらにこの見かけの掘方に飾板を立てかけたと考えられる。その後、飾板や朝顔形(壺形)の破片を含みつつ①で埋めていく過程となる。→〔**段階 2**〕

【3】飾板と軸部の埋め戻し後に、次の段階があったかどうかは、本来の造出上面レベルが確認できていないため不明である。朝顔形(壺形)口縁部の破片が飾板や軸部の上に置かれていたと仮定すれば、段階 3 が存在した可能性を残すといえる。

このように、まず埴輪設置範囲の周辺を墳丘盛土(②・③)で平面円形の土坑状に積み、埴輪を設置する。埴輪を設置後に内部を埋める時には①を使用するという工程を少なくとも 2 回行っていると考えられる(段階 1 ・ 2)。最終的な断面の確認で、段階 2 の埴輪設置面とほぼ同じ高さで盛土の違い(②・③)が認められたことも、段階的な埋設と考える根拠のひとつである。しかし、①の中で土層に違いは認められなかった

ので、段階１と２はあまり時間はおかずに、連続する可能性が高いと考えられる。

段階的な埋設行為と考えられるため、この遺構は造出上で行われた何らかの祭祀痕跡であろう。しかし、これが墳丘完成後に行われたのか、築造過程で行われたのか、また、なぜ破壊されたような埴輪が使用されているのかなど、不明な点は多い。

特に最も下から検出された埴輪底部は、いったん樹立されていた埴輪が削られた残骸かとも考えられるような状況である。しかし、埴輪を削ったような攪乱の土層は認められず、蓋形や朝顔形（壺形）とは直立する位置関係であり、これらが偶然に集まっていると考えることは難しい。

また、この遺構が築造時のものか否か、後世に埋設された可能性はないか、ということも問題となろう。第７トレンチの葺石の残存レベルから考えると、この遺構を埋め戻した上面は造出上面とほぼ一致すると考えられるが、本参考地築造時期の遺構であると断定することはできない。蓋形埴輪の立飾りや朝顔形（壺形）埴輪の口縁部など埴輪の一部が利用されていることから、一定期間おいた後の埴輪の再利用も考えられるため、当面、遺構の構築時期については保留するほかない。

（５）後世の改変について

広陵町教育委員会による周濠部の調査結果から、浚渫など周濠部の利用や改変は平安時代中期以降～近世の間で複数回行われていることが指摘されており、墳丘部も少なからず影響を受けていたであろうことが推察される。そのため、各トレンチ内で確認された盛土の時期や性格を単一のものとしてまとめることは容易ではない。

本調査において墳丘裾部に設定したトレンチは、北側の今池に面した範囲ではなく、南側を中心とする既に陸地化している範囲にあたる。しかし、おしなべて盛土が確認されていることから、浚渫土ではない盛土が大半であると考えられる。現に浚渫土に特徴的な灰褐色を呈する粘質土は確認していない。

その中で、第６・８トレンチなどを中心に多くのトレンチで中近世遺物が出土しており、第６トレンチ盛土内からは 19 世紀中頃以降と考えられる染付（第 27 図 55）が出土している。そして、中世遺物と近世遺物では、圧倒的に近世遺物の割合が高い。また、第６トレンチに見られるような近世末の遺物の時期と、今池の造成時期との関係から、両者の関係が指摘されている[(5)]。この点を踏まえて、新たに作成した墳丘測量図と陵墓地形図、今回の調査結果を再見してみたい。

前方部前面の北よりには、今池の南側を堰き止める堤が造られている。新たな測量図で顕著であるが、堤と前方部の接続部付近の南側から等高線の乱れが認められる。このことから、あるいは堤より南側の墳丘部では、築堤のための土取りが行われた可能性が考えられる。よって、これが埴輪列や葺石といった墳丘外表施設を失わせる要因のひとつになった可能性が考えられよう。一方、特に第１トレンチにみられた現状テラス面付近の厚い盛土は浚渫土ではないと考えられるため、築堤の残土などが戻された可能性もあり得るが、どのような経緯で形成されたかが問題となる。

ところで、陵墓地形図をみると、現在の墳丘第１段テラス面上には、堤と前方部の接合部付近から第９トレンチ付近まで溝が表記されており、これは現在も現地を歩けば地表面にくぼみとして確認できる。また、第１トレンチ土層断面図の左上端のくぼみがこの溝にあたり、溝全体の中では東端付近に位置する。そして、第１トレンチで確認されるこの溝の標高は 56.5 ｍである。一方、溝の西端付近に位置する第９トレンチでは、第１段テラス面にあたる標高 55 ｍ付近にこの溝が確認できる。ここで注目すべきなのは、第１トレンチ付近と第９トレンチ付近では、約 1.5 ｍの高低差をもって前方部の第１トレンチ側が高いということである。本参考地は第９トレンチのある後円部が高い丘陵斜面にあり、第１トレンチのある前方部側に向かって下る地形上に築かれている。さらに、後円部の第９トレンチ埴輪列基底部の検出面は標高 55.9 ｍ付近であるが、前方部の第５トレンチ埴輪列基底部の検出面は標高 55.2 ｍ付近である。第５トレンチの埴輪列は上方からの移動が考えられるため、本来はもう少し高い位置にあったと考えられるが、第９トレンチの高さと同程度までと考えられる。築造時のテラス面もまた、地形と同様に前方部側が下降しているか、あるいは水平に近いと考えられる。つまり、溝が作られている現状の第１段テラス面は、盛土によって周辺地形とも

築造時のテラス面とも逆の傾斜面を形成していることがわかる。

このことから、盛土は、今池から汲み上げた水を墳丘南側の耕作地に送る水路として利用するために、高低差をつけることを目的に行われた可能性が考えられる。このように考えられるならば、第１～９トレンチ間に認められる盛土の時期と性格は、ある程度同じまとまり、すなわち今池の造成とその水利に関わるものとして捉えることが可能となろう。これは、途中の第６トレンチ盛土（Ⅱa）内から19世紀中頃以降の磁器が出土していることとも矛盾しない。しかし、盛土の規模に比べて溝の規模は小さいため、そこまで有機的に関連させられるかは多少の疑問が残る。あくまでひとつの理解として提示しておきたい。

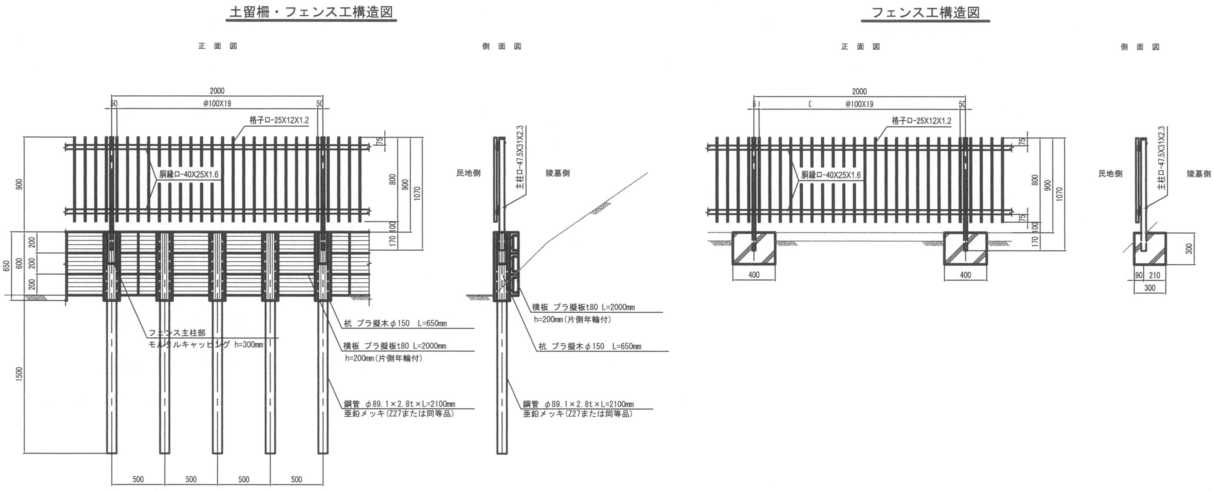
また、第１～９トレンチでみられた盛土のうち上層のものは、今池の造成に伴うものと考えられるにしても、下層のものについての性格、時期は、現状では不明というほかないものもある。遺物の様相から断片的に推測するならば、先述のとおり中世遺物の割合が低いことから、中世における盛土の可能性は低く、多くは近世の盛土と考えることができようか。よって、土層で確認される盛土の区別も、多くは近世の中に属するものと考えられる。しかし、近世の中での細かい区別については、それを明らかに出来るような遺物の出土状況にないため、不明と言わざるを得ない。

なお、第10～12トレンチや墳丘第２段斜面以上でみられた削平と盛土については、盛土から少量の陶磁器や瓦の破片が出土していることから、当面は第１～９トレンチの盛土の時期に近い可能性を考えておきたい。

以上述べてきたように、やや消極的ではあるが、墳丘の外表施設が失われる原因となった改変と盛土に、ある程度は有機的な関連があると考えることは可能であろうか。よって、いったん削られた墳丘盛土あるいは地山上に堆積する盛土との間には時期差があまりない箇所も多いと考えられる。明瞭な旧表土の認められたトレンチがないのはこのような理由によるのかもしれない。（清喜）

ま と め

調査成果について　今回の調査は、外構柵設置範囲の調査であったため、墳丘南側面を中心とした範囲において実施した。各トレンチの所見から、本来の墳丘裾は既に周辺耕作地の開発によって削られていることが明らかとなった。特に前方部の前面南半部から南側面東半部（第１トレンチ～第５トレンチ付近）にかけては、いったん墳丘が大きく削られた後に、大規模な盛土が行われていた。これにより、一見するとあたかも本来の墳丘面を留めているかのように復旧されていたことが判明した。よって、この範囲では、ごく一部（第４トレンチの葺石、第５トレンチの埴輪列）を除いて、本来の遺構はほとんど残存していないと判断できる。調査箇所の多くで後世の盛土を確認した。時期の不明なものあるが、比較的上層の盛土については、墳丘北側の今池の造成とその水利に関わる可能性が考えられる。



第31図　三吉陵墓参考地　工事図面立面図

一方、前方部南側面中ほどから南造出を経由して後円部南側面中ほどに至る範囲（第５トレンチ～第９トレンチ付近）については、裾付近まで比較的葺石が残存していた。しかし、後円部西側（第９トレンチ西側～第12トレンチ付近）では再び墳丘裾は削られており、第９・10・11トレンチでは第１段テラス面や埴輪列、葺石が確認されたものの、本来の墳丘裾については、調査範囲内では確認できず、境界線の外側に本来の墳丘裾が存在したと考えられる。

なお、第９・10・11トレンチでは、延長した位置に広陵町教育委員会によるトレンチが設定されたが、当庁の境界線の外側においても、本来の墳丘裾を確定できるような痕跡は認められなかった。

遺物は、遺構の残るトレンチを中心に埴輪が出土している。第５・９・10トレンチでは埴輪列が検出された。円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、第６・７トレンチなど造出周辺では形象埴輪（蓋形・短甲形・家形）が確認されている。埴輪は全体に摩滅が激しい。また、土器片も少量出土している。それ以外では、中近世遺物があるが、中世遺物は微量で、近世の陶磁器類が多く確認されている。前方部に見られる大規模な盛土を中心に、各トレンチで確認された後世の盛土に伴うものである。

墳丘の形態・規模は、近隣に所在する巣山古墳に近似しており、葺石のあり方にも類似性が認められるようであるが、埴輪などは摩滅が著しく詳細な比較検討は今後の課題である。

工事内容について　調査の結果、境界線沿いに葺石が残る箇所のあることが判明した。具体的には第５トレンチから第９トレンチ間である。この間では葺石を保護するため、外構柵の位置を境界線沿いではなく、現在の墳丘裾から急激に立ち上がった斜面の肩付近に上げ、基礎自身も厚みの減じたものを使用することで葺石に影響が及ばないように配慮した。それ以外の範囲については、開墾等により遺構は残存していないと判断されることから、境界線に沿った位置での設置を行うこととした（第31図）。　（清喜・横田）

註

（１）　広陵町史編集委員会編『広陵町史』本文編、広陵町、2001年。

（２）　井上義光『昭和62年度　石塚古墳範囲確認調査概報　新木山古墳外堤範囲確認調査概報』（広陵町埋蔵文化財調査概報１）、広陵町教育委員会、1988年。

井上義光『新木山古墳外堤第２次範囲確認調査概報―ノノワ古墳群発掘調査概報―』（広陵町埋蔵文化財調査概報８）、広陵町教育委員会、2010年。

（３）　奈良県立橿原考古学研究所（編）『森本六爾関係資料集Ⅰ』,（財）由良大和古代文化研究協会, 2011年。

（４）　応神天皇陵飛地ほ号（墓山古墳）から三角板革綴襟付短甲を表現した埴輪が採集されているが、この資料も帯金を粘土帯により立体的に表現している。

小野山節ほか編『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第２部、京都大学文学部、1968年。

（５）　吉村公男「《陵墓限定公開》新木山古墳」『古代学研究』第191号、古代学研究会、2011年。

1　三吉陵墓参考地北側面
近景（北東から、手前が今池）

2　三吉陵墓参考地南側面
近景（西から）

3　三吉陵墓参考地後円部
近景（西から）

1　第1トレンチ　全景（東から）

2　第1トレンチ　拡張部近景（東から）

3　第1トレンチ　平坦面（南東から）

4　第1トレンチ　平坦面北壁（南から）

5　第1トレンチ　転落石（南東から）

6　第1トレンチ　拡張部北壁（南から）

1　第２トレンチ　全景（東から）

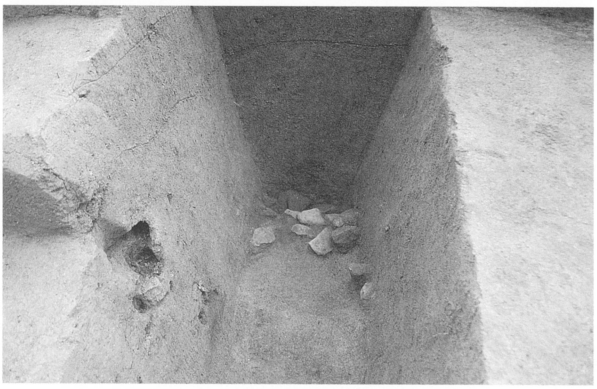
2　第２トレンチ　西壁（東から）

3　第２トレンチ　東半部西壁（東から）

4　第３トレンチ　全景（東から）

1　第４トレンチ　全景（南から）

2　第４トレンチ　東壁（西から）



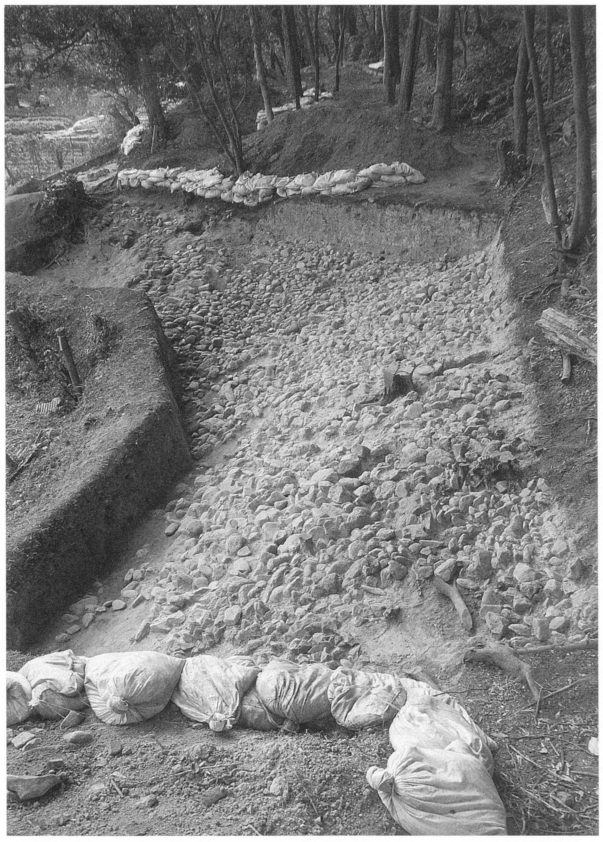
3　第４トレンチ　南端（北から）

4　第５トレンチ　全景（南から）

5　第５トレンチ　東壁（南西から）

6　第５トレンチ　埴輪列（南から）

1　第６トレンチ　全景（南東から）

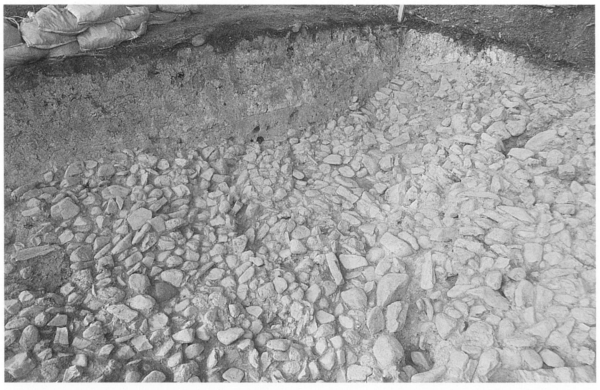


2　第６トレンチ　葺石（東から）

3　第６トレンチ　葺石（南から）

1　第６トレンチ　葺石近景（南から）

2　第６トレンチ　西拡張部（南東から）



3　第６トレンチ　葺石近景（南東から）

4　第６トレンチ　葺石近景（東から）

5　第６トレンチ　葺石近景（南から）

6　第６トレンチ　土師器出土状況（北西から）

1　第７トレンチ　全景（南から）

2　第７トレンチ　全景（東から）

3　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（１）〔段階２〕

4　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（２）〔段階２〕

5　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（３）〔段階２〕

1　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（４）〔段階２〕

2　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（５）〔段階２〕

3　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（６）〔段階２〕

4　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（７）〔段階２〕

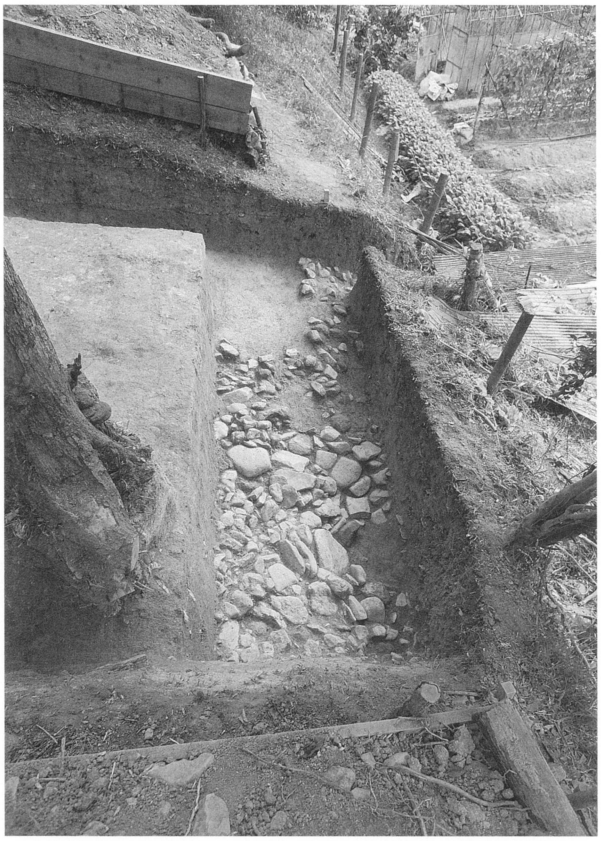
5　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（８）〔段階２〕

6　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（９）〔段階２〕

7　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（10）〔段階１〕

8　第７トレンチ　埴輪埋設遺構（11）〔段階１〕

1　第８トレンチ　全景（南東から）



2　第８トレンチ　葺石（西から）

3　第８トレンチ　葺石（北から）

4　第８トレンチ　拡張部葺石（西から）

1　第９トレンチ　全景（南から）

2　第９トレンチ　近景（南から）

3　第９トレンチ　墳丘第２段目葺石（南から）

4　第９トレンチ　墳丘第１段目葺石（南から）

5　第９トレンチ　近景（北西から）

1　第９トレンチ
埴輪列（南上方から）

2　第９トレンチ
埴輪列（南から）

3　第９トレンチ
埴輪検出状況（南から）

1　第 10 トレンチ　全景（南西から）

2　第 10 トレンチ　東壁（西から）

3　第 10 トレンチ　埴輪内埋土（南西から）

4　第 10 トレンチ埴輪列（南西から）

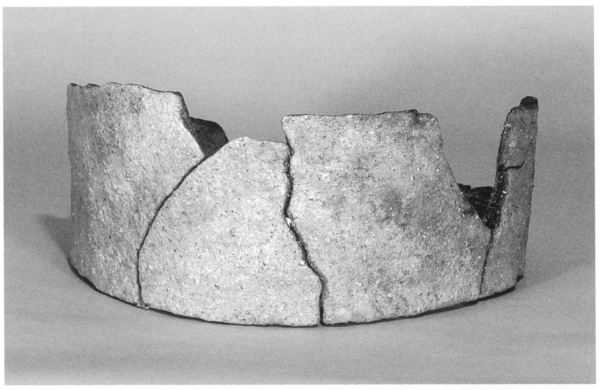
1　第 11 トレンチ　全景（西から、手前は広陵町調査区）

2　第 11 トレンチ　近景（西から）

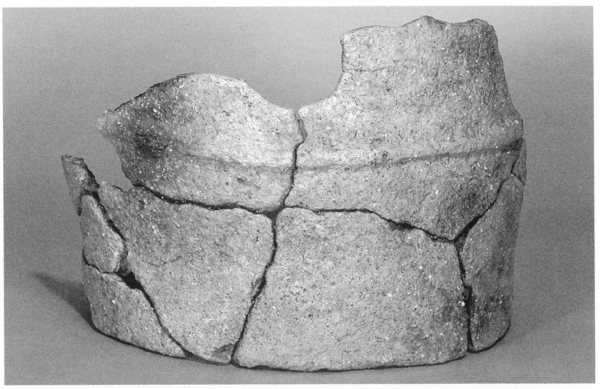
3　第 11 トレンチ　墳丘第 2 段目葺石（西から）

4　第 11 トレンチ　南壁（北西から）

5　第 12 トレンチ　全景（西から）



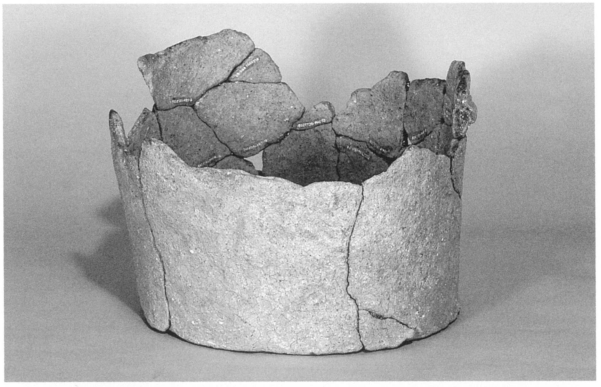
1　円筒埴輪（第５トレンチ No. １）



2　円筒埴輪（第５トレンチ No. ２）

3　円筒埴輪（第５トレンチ No. ３）

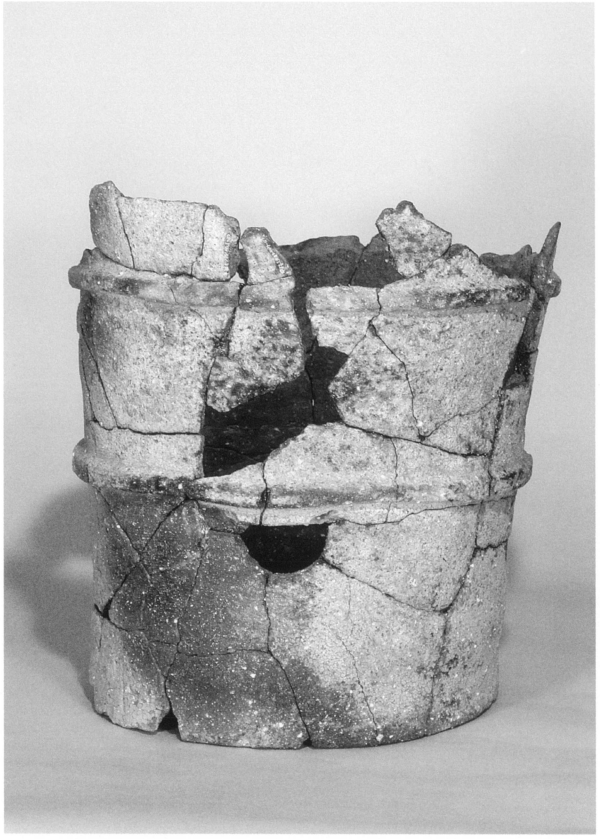
4　円筒埴輪（第５トレンチ No. ４）



5　円筒埴輪（第９トレンチ No. １）

6　円筒埴輪（第９トレンチ No. ２）

7　円筒埴輪（第 10 トレンチ No. １）

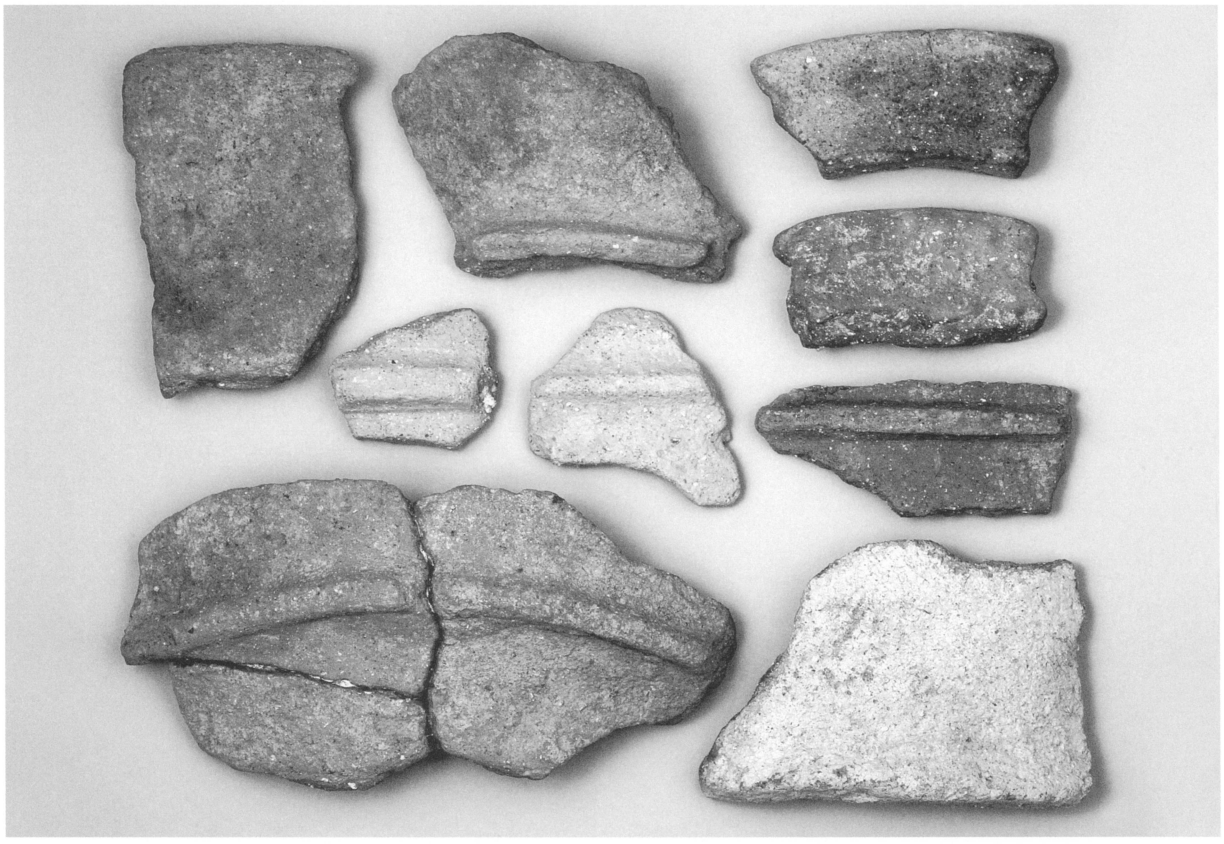


1　円筒埴輪（第 10 トレンチ No. 2）

2　円筒埴輪（第 10 トレンチ No. 3）

3　円筒埴輪（第 10 トレンチ No. 4）

4　円筒埴輪（第 10 トレンチ No. 5）



1　円筒埴輪・壺形埴輪・朝顔形埴輪

2　短甲形埴輪

1　蓋形埴輪・円筒埴輪（第７トレンチ埴輪埋設遺構出土）

2　陶磁器